

## 特集【先進国】に学ぶ

《ジョン・ミラー氏の講演から》  
天使は深刻にならないから  
翔べるのです

—カナダのホリスティック教育

私たちだって戦えば……！

—ノルウェーのクオータ制から得たもの

大和田香織

アフリカから考える—リプロダ

クティブ・ヘルス&ライツ(2)

草野いづみ

この世でただ一人の特別な人

—カナダで受けた教育

キャロル・ホイ

# We

# 12

1997

くらしと教育をつなぐ We



女と男の家庭科新時代

女たちの情報紙  
**ふえみん**  
 f e m ♀ n

婦 人 民 主 新 聞  
 WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は

伸びつづける。

からだのしんぱいは  
 はたらくもんだい  
 こころのえいよう  
 さべつへのいかり  
 アジアのうごき  
 あんぜんてなに？  
 きのうまでのみち  
 あしたへのみち  
 わたしのいけん  
 あなたのいけん  
 おんなという  
 ちから。

世の中に？を  
 もち始めた。  
 男たちにも。

創立以来、無党派の立場で50年。  
 女の視点で創る、もうひとつのメディア。

新聞代	(送料込)
1ヶ月	750円
3ヶ月	2,250円
6ヶ月	4,500円
1年	9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301  
 TEL 03(3402)3244, 3238  
 FAX 03(3401)3453

大阪府協 大阪市北区中崎西3-1-5  
 TEL 06(371)2429

ふえみん婦人民主新聞  
 婦人民主クラブ責任編集



『フェミックス通信』の  
 読者になってください。

フェミックスのもう1つの顔、それはカウンセリング部門！  
 ユニークな人々によるユニークな活動が日々展開されています。  
 『We』ではお伝えきれない素顔のフェミックスをお届けします。  
 気軽に読んで楽しめて笑って役に立つ通信です。

◎内容：

シリーズ「私にとってフェミックスとは？」  
 講座情報、受講者の声  
 書評『日々是好書』  
 誌上アサーティブネス・トレーニング講座 など

◎年会費 2000円 (年5回発行/ B5版/ 8頁)

◎お申し込みは

「フェミックス通信」編集室まで  
 TEL&FAX 03-3424-3603  
 郵便振替 00130-7-754314「(有) フェミックス」

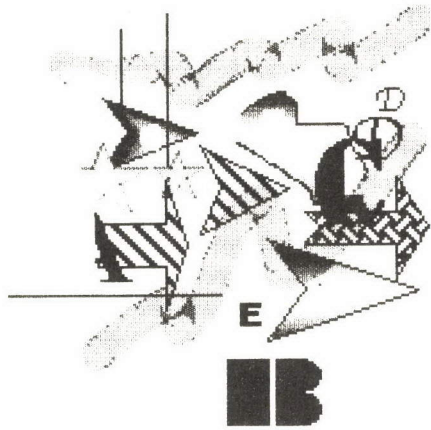


97年12月号

くらしと教育をつなぐ

We

◆ 特集 「先進国」に学ぶ ◆



Tami

## 女と男の家庭科新時代

- |  |                   |
|--|-------------------|
| ■ フェンスを越えて                                   | 小平 陽一 ……………30     |
| ■ 私の家庭科ラフスケッチ                                | 大場 広子 ……………31     |
| ■ 家庭科—風がかわる匂いがかわる<br>『食生活』をめぐる—五感への信頼を回復させたい | 入江 一恵 ……………35     |
| ■ オホーツクの潮風荒く                                 | 江口凡太郎 ……………39     |
| ■ 楽市楽座—「三種の神器」の巻                             | 加藤 昭仁 ……………40     |
| ■ かる〜い家庭科相談室<br>—「静寂が欲しい」の巻                  | 首都圏家庭科編集室 ……………42 |
| ■ 共学家庭科論争<br>—家庭科への期待                        | 林 立彦 ……………45      |

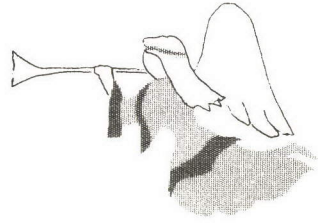
### 連載

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| ● シネマの魔         | 武田 秀夫 ……………50 |
| ● いきいきごんぼ       | 桑田 良彦 ……………54 |
| ● 変な子じゃないよね     | 滝野澤直子 ……………56 |
| ● このままではいけない?   | 吉原 令子 ……………58 |
| ● 蔦森樹の巡業日記      | 蔦森 樹 ……………60  |
| ● おんなが歳をとるということ | 木村 栄 ……………61  |
| ● 居場所考          | 水田 宗子 ……………62 |

- ◇ 編集後記 …………… 65

## 特集「先進国」に学ぶ

- ★ジョン・ミラー氏の講演から  
天使は深刻にならないから  
翔べるのです  
—カナダのホリスティック教育  
(まとめ・稲邑恭子) ……4
- ★私たちだって  
戦えば……！  
—ノルウェーのクオータ制から得たもの  
大和田香織 ……12
- ★アフリカから考える——リプロダ  
クティブ・ヘルス&ライツ(2)  
草野いづみ ……18
- ★この世で  
ただ一人の  
特別な人  
—カナダで受けた教育 キヤロル・ホイ ……25



特集「先進国」に学ぶ

★ジョン・ミラー氏の講演から

天使は深刻にならないから  
測べるのです

—カナダのホリスティック教育

(まとめ・稲邑恭子)

ジョン・ミラー氏はトロント大学オンタリオ教育研究所の教授で、カナダの公教育で既に実践されているホリスティック教育の第一人者。日本でも『ホリスティック教育——いのちのつながりを求めて』春秋社、『ホリスティックな教師たち』学習研究社（新刊）などの訳書があります。

ミラー氏の講演記録は既に小誌の九四年一〇月号に前回来日時ものが掲載されていますが、三年後の今年四月に東京の国立教育会館で行われた講演を聞いて、その今日的な意義をますます実感して、日本ホリスティック教育協会に掲載の許可をいただきましたとめてみました。

ホリスティック教育に関しては九七年六月号の『We』にミラーさんの著書の訳者である吉田敦彦さん（大阪女子大学助教授）が書かれたものがありますので、ぜひ併せてご参照ください。

いのちのつながりや直観、精神性などを重要視しながらも、反面、合理性や分析的思考とのバランスも大事だとする立場は、東洋と西洋の、あるいは男性性と女性性の統合の一つのヒントにもなり、ややもすると〈暗くて重く〉なりがちな日本の教育の流れを変えるきっかけになりうるような気がしています。（稲邑）

## いままぜホリスティック教育が必要なのか

いま、社会全体の傾向として全体よりも「部分」に焦点が当てられがちになっています。教育の分野でも、学校で教えられている知識はさまざまな教科に細分化さればらばらになっていて、高学年になるにつれ、それらの知識の全体的なつながりをいっそう見つけにくくなっています。教育はダイナミックに動きつつある現実のエネルギーを反映するものになっていません。ホリスティック教育は、その中であって、全体性の流れを取り戻し全体と部分のつながりの関係を回復させることをめざします。

七歳で失明し第二次世界大戦中レジスタンスに関わりナチに捕らえられ強制収容所に送られた一人のフランス人がいます。彼は目が見えないだけに他の感覚が優れていた人で、ホリスティックということについて文章を書いています。彼の言っていることは、ただ子どもの前に立つのでなく、「子どもとともにある」というホリスティック教育のイメージを象徴的に表していますので、次に紹介したいと思います。

〈目が見えなくなることで、何かに出会うためには、自分から出かけていかななくてはならなくなつたと思ひ込んで行きました。けれども私に必要なことは、途中まで歩いて行くことだけで、あとは宇宙のほうから自分に近づいてくれるのでした。例えば林檎に触れると、自分の指と林檎との区別が付かなくなる、自分が林檎に触れているのか、林檎が自分に触れているのか分らない状態になります。自分が林檎の一部になり、林檎が自分の一部になるのです。私はこういう経験を通して、目で見ること以上のことを《見る》ことができました。傍観者となつて生きるのではなく、ものそのものになって生きるということ。まさしくこれが愛ということなのです〉。

## ホリスティック教育の三つの要素

私は九四年に初めて日本に来たとき以来、日本人は日本人独自のホリスティック教育のありかたを考えていてほしいと思ってきました。日本の社会にはそれ特有のすばらしいものがあるので、みなさんはそれを生かしたユニークなものを考えてほしいと思います。そのことを押さえた上で、次に私の基本的な考えかたを述べ

たいと思います。

### 〈バランス〉

ホリスティック教育は〈バランス〉と〈包括〉と〈つながり〉という三つの視点から考えることが出来ますが、まず最初に、バランスということを考えたいと思います。地球のエネルギ―には陰と陽のバランスがありますが、これまで西欧的な産業社会で支配的だったのは男性性、合理性、論理性、独立心、自立などを大切だとする考え方です。その反対側に浮上してきたのが女性性、直観、相互依存などを大切にしている人は反対側の価値観の浮上に対して恐怖を抱く人が多く、女性や環境問題で活動している

### バランス

男性性	女性性
自律独立	相互依存
量	質
外向	内向
合理性	直観
経済成長	環境調和
ヒエラルキー	ネットワーク
技術	意識
物資主義	精神性
国家	地球と地域

人に対して暴力を振るうことがあります。いま私たちは普通のやりかたに固執して滅びるのか、双方の間にいいバランスを回復して生き延びていくのかの岐路に立っているのだと思います。

教育におけるバランスも同様で、たとえば西欧社会の教育は過去三百年間、個人の到達度の評価に焦点を当ててきたのですが、ここ一〇―一五年間はそれがゆらいで協同学習の重要性が目立ってきています。

このようにホリスティック教育とはさまざまな要素をバランスのとれた状態に保つていく営みなのです。

### 〈包括性〉

次に教育の包括性ということでは、ひとつには、障害をもっている子も様々な問題をもっている子もみんなと同じクラスで学習しようという傾向がでてきたということがいえると思います。

ホリスティック教育には、〈こう教えなくてはいけない〉ということはありません。そのような伝統を作らないことがホリスティック教育の包括性といえます。

教育方法に関しては三種類あって、第一がテストをしてどれくらい覚えるかの伝達型の学習、第二が教師と生



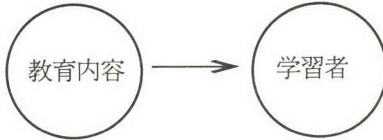
徒が対話しながら問題解決を学ぶ交流型の学習、第三が生徒を知的な存在としてだけでなく精神性を含めた存在として捉える変容型の学習。包括とはこの三つの教育方法のどれ一つとして排除せず包み込むということなのですが、この三つの教育方法の関係そのものも固定しているのではなく、流れに沿って動き、そのときどきでバランスをとりあっています。

〈つながり〉

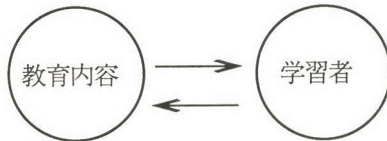
ホリスティック教育はつながりに焦点をあてていません。さまざまなつながりがあるなかでとりあえず6つの

包括性

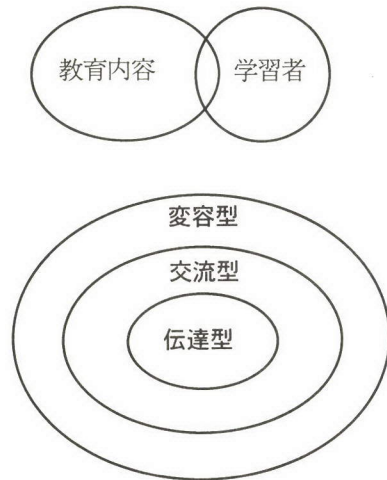
伝達 (トランスミッション) 型



交流 (トランスアクション) 型



変容 (トランスフォーメーション) 型



\*【ホリスティックな教師たち】(学習研究社)を参照

つながりをあげてみます。(9ページ表参照)。

先ほど言いましたように、ホリスティック教育では学習するものが外にあるのではなく、子どもが〈学習しているものそのものになる〉ことが大事です。〈学習するものそのものになる〉ということは大人にとってもおこることで、例えば画家が木を描くとき、画家はある意味で木そのものになります。

1. 合理的思考と直観のつながり

特に西欧社会では分析的な解決方法がとても大切だとされています。分析的な解決方法では、問題が起きたと

きに何が問題であるかを明らかにして、どのような解決法があるかを考え、何を基準に判断するかを基準を考えて、基準にあった解決方法を選択し最後に解決するという方法を採りますが、直観とか想像力が考慮に入れられていないという限界があります。

直観的な問題解決法では、従来の分析的解決法と違って準備の段階のあと、解決法にすぐに入らないで熟成とひらめきの段階に入ります。情報収集の準備の段階と、問題に焦点をあてる検証の段階は、知的な分析作業ですが、熟成の段階では準備の段階で得た何が問題であるかをいったん忘れて自分自身の世界の中に入っていき、温めて熟成させ、ひらめきが生まれるのを待つのです。

例えば鍵をなくしたとして、心当たりの場所をさんざん探す。これが準備段階です。それでも見つけれないとき、探すのをやめる。鍵のことを考えることをいったんやめて、他のことをします。散歩したり料理したりもいいでしょう。そして、「鍵が絶対にほしい」という、すべてをコントロールしたい気持ち横に置き、「来るときは来る」と今の状態を受け入れることで熟成の段階に入ります。私たちは常に先のことを考え計算する傾向があるので、熟成の段階で「考えることをやめる」とい

うことが必要なのです。

分析的な思考を使いすぎると、想像力や直観を使う場がなくなりやすくなります。例えばベーターベンがウィーンの森に入ってひらめきを得ていたように、芸術の女神と出会い、違った次元のエネルギーにつながることでできるのは熟成とひらめきの段階においてなのです。そして、このアイデアを検証の段階で、ふわふわしたものでなく現実根ざしたものに变えていくためには、分析と直観とのバランスも、また大切になります。

では次に直観をどのように私たちの生活に取り入れていくのかを紹介します。イメージワークは癌治療等の医療やスポーツの分野で使われていますが、ある特定の場や状況を作り出すことができます。テストをする前にイメージワークを使い生徒をリラックスさせることもできます。想像力の豊かな子どもほど外的刺激にまどわされず、自律性があり、問題行動が少なくといわれています。物語を読んで内面の世界を豊かにすることによって子どもは自分が生きる世界を見つけようようになります。物語を読んで聞かせるときには目を閉じて自由に想像力を働かせてもらいます。シユタイナー教育では、ろうそくをつけながら特別の雰囲気を作ることで子どもが物語

## つながり

### 1.合理的思考と直観のつながり

メタファーによる思考  
イメージワーク  
批判的思考

### 2.からだと心のつながり

からだの動き/ムーブメント  
ダンス  
演劇/即興  
心の覚醒/マインドフルネス

### 3.教科のつながり

テーマ学習  
芸術による統合  
ストーリーモデル

### 4.コミュニティとのつながり

協同学習  
招き入れる教育  
学校と地域のつながり  
グローバル教育/国際理解教育

### 5.地球とのつながり

先住民の物語や知恵  
環境教育/ディープエコロジー

### 6.自己とのつながり

文学/物語/神話  
日記  
ストーリー/宇宙の物語

のイメージの世界に深く入っていきます。物語を自分で引寄せてその中に入っていく、物語そのものになるのです。イメージワークで体験したイメージを後から詩とか作文や絵に描かせることもいい方法です。

## 2. からだと心のつながり

西欧社会ではからだに対して否定的な感情と肯定的な感情とが相半ばしています。おいしい食べ物のCMのあとにダイエットのCMが来るといふように、からだを愛しているけど憎むというアンビバレンツな状況にあります。自分の体を「家」のように感じている人は少ないようです。自分の体に肯定的な思いを抱くことは大切なことです。話や音楽を聴きながら体を動かすことで、子

どもは自分の体に肯定的な思いを抱くことができます。高学年になると抵抗を感じるようになるので、今度はむしろ演劇などを通して言葉とからだの流れをつなげることができそうです。

マインドフルネス（心の覚醒）というのはむしろ大人の側の問題で、自分自身を「いまここ」にしつかり根をおろさせるといふことです。生活がせわしなくなっていて、いまここに自分自身があるという状態に置くのがとてもむずかしくなっている。次にやらなければならぬことが常に頭の中で回っていて、「いまここ」にいることができない。自分自身が体の中にいないでいつも浮いているような状態です。子どもは大人が、「いまここ」

にいないことを鋭く敏感にキャッチします。

いまやっていることに専念して心を覚醒させてください。世界の重大な問題の解決のことを考えながらセロリを切ったりしないで、洗濯ものを畳むとか、話をするとか、子どもと遊ぶとか、なんであろうと自分がいまやっている行為に専念してください。大人が教師が(はいまこ)んにいてくれることを子どもは何よりも必要としていると思います。大人にとっても子どもにとっても言えることですが、他人に対して開かれている人と共にいると、癒しの体験をすることができます。けれども、いつも自分のやりたいことや話したいことがあらかじめ決まっています、他人に対して開かれていない人の前に行くと、その人とながつているという感じをもつことができますせん。

### 3. 教科のつながり

バラバラになつている教科のあいだにつなかりを作ろうとする試みは北米の小学校から大学までの全教育課程で推進されるようになりました。さまざまな方法が試みられていますが、そのひとつ、テーマ学習というのは、ひとつの大きなテーマのもとに、歴史、美術、数学、国語などあらゆる教科を統合していくことです。

### 4. コミュニティとのつながり

西洋社会は個人主義が発達しているので、もう一度共同体の感覚を取りもどすことが必要だと思えます。ただ日本の場合には、むしろ共同体に重点が置かれているので、個人と共同体とのバランスを再考することが必要だと思えます。

### 5. 地球とのつながり

なにかしらの環境保護活動に関わるとか、先住民の知恵や物語にふれることもとても大切です。

### 6. 自己とのつながり

ここで言う自己というのは、いつも自分にとって都合の良いように、ものごとを支配し操作しようとしているちっほけな自分、エゴ(自我)のことではなく、もう一つの大きい方の自己、他人のあらゆる者と共存し共感しようとする知恵の源、仏性のことです。二一世紀に向けて、私たちはエゴを小さくして自己を大きくしなければなりません。

では、どのように自己を大きくするかということですが、多くの神話や物語文学はエゴと大いなる自己の葛藤がテーマですから、この葛藤を深く読んでいくことがこれから必要になるでしょう。子どもに対するとき、エゴ

からでなく自己から何かをすることが大切です。

究極的に言えば、ホリスティック教育とは方法や理論ではありません。すべて「大いなる自己」から来るものです。そして「大いなる自己」を育てるためには、先ほど言いましたように私たちの心の覚醒、「へいまここ」にあることが大事であることを述べましたが、もうひとつはゆつくりすること、忙しさのなかでも意識的に「間合い」をとることが必要です。生活のペースを意識的に落とすことで、深いところにある驚きに意識を向けることができますようになります。ゆつくりするには何もしない時間を作ること、瞑想はそのひとつですが、それ以外にも、園芸、編み物、裁縫など自分が没頭できる趣味をみつけ、「計算している」状態から「聴いてみる」状態に自分を変えていくことです。

ゆつくりすることの次に、軽くなること、笑うことの大切さを強調したいと思います。批判的で暗くて重いホリスティック教育ではおもしろくありません。イギリスの作家チェスタンは「天使は深刻にならないから翔べる」と言っていますが、人生は踊りのようなもの。その踊りのリズムは宇宙のリズムへとつながっています。宇宙の大いなる踊りの輪に溶け込んでいくように生きてい

きましょう。そして、精神性を強調するあまり、人間として生きることから離れないように、現実の生活の中で笑って泣いて人生を十分に体験することが大切です。

ホリスティック教育を主張することでバリアを張らないで下さい。精神性を重視しすぎはだめです。知人に瞑想を治療に使いながら精神性という言葉なるべく使わないようにしている医師がいます。精神性やホリスティックということばをあまり語りすぎないでください。語りすぎると、かえってそれが人との境界を深めます。

老子のことばにとってもいいものがあるので、引用します。へつま先で立つ者はしつかりと立つことはできません。先を急ぐものは遠くには行けない。輝こうとする者はみずからの光を曇らせる。……道と共にあるといういうことは、自分のやるべき事をやり、後はあるがままに任せるといふことです。

☆日本ホリスティック教育協会事務局

〒232 横浜市南区吉野町4-19-2-102

TEL045(243)6244

FAX045(243)6241

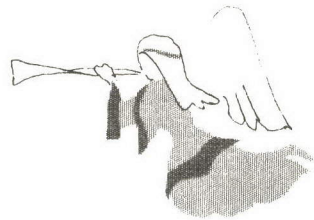
『季刊ホリスティック教育』(年四回) / ニュースレター / 研究紀要で年会費六〇〇〇円

特集「先進国」に学ぶ

## 私たちがだって 戦えば……!!

—ノルウェーのクオータ制から得たもの

大和田香織



### 「希望の旅」

女性閣僚の一人もいない第二次橋本改造内閣が発足した九月一二日、私は、当選者の四割を女性が占めるというノルウェー国会議員選挙の様子を見るため、成田を発った。

フェミニニスト議員連盟の三井マリ子さんが企画したこのツアーは、題して「日本に女性議員を増やす希望の旅」。チラシが舞い込んだのは、ちょうど、勤統一〇年の休暇の算段をしていたころだった。ノルウェーの政党のクオータ制度については以前にも聞いて、日本で実現の可能性はないのかどうか、記事にまとめたことがあったが、国内政党の反応は「検討する」とか「男性への逆差別」——。地方の

女性議員に話を聞けば「立候補しようとしたら夫の親戚に反対された」「(地域のボスに逆らい女性候補者を)表立って応援できない」といった話が多く、「クオータは遠い国のお話」という印象だった。

ノルウェーの女達はなぜ、こんな制度を定着させられたのか、男たちは日本の男と違ってよほどお人好しなのか、自分の目で見極めるよい機会である。お金も時間も余裕がなく迷ったけれど、個人的にもオヤジ職場で息が詰まりそうになっていた私にとって、この旅行は文字通り「希望の旅」となった。「日本の女だって、戦い続ければ何か得られるはずだ」というささやかな確信を同行した仲間と共に得

られたのだから。

## クオータ制での選挙

クオータについては本誌でも何度か取り上げられているようなので簡単な説明にとどめるが、女性や少数民族、障害者など歴史的、構造的に差別されてきた人々を対象に、選挙の候補者、入学試験の合格者、採用する労働者の選抜などで一定の優先枠を割り当てる制度だ。政党の女性政策としては、ヨーロッパを中心に三〇カ国以上でなんらかの形で採用されている。

ノルウェーでは一九七九年施行の男女平等法が八八年に改正され、「公的機関が四名以上の構成員を置く委員会、審議会、評議会等を任命または選任する場合は、それぞれの性が構成員の四〇%以上選出されなければならない」と定められた。クオータ制について調べてきた三井さんによれば、ノルウェーの特徴は、具体的な数値を法律の条文で挙げている点と、法の規制を受けない政党が自発的に（いくつかの党は八八年の改正以前に）クオータを採用している点だという。

完全な比例代表制選挙なので、有権者は政党が作成した候補者名簿をみて政党に投票するが、国会に議席を持つ主

要政党七党のうち、「クオータ反対」の進歩党を除き、六党はクオータ制を取り入れ、候補者名簿のほぼ半数が女性だ。

今回の選挙ではその進歩党が、「移民排斥」や「育児手当など現金支給のアップ」など右翼的な主張と党首人気で大躍進し、そのためか、当選議員の女性比率は一六五人中の六〇人、三九%から三六%に下がった。が、その進歩党でも首都オスロでは当選圏の上位四人中、三、四位を女性にあてている。さらに、この選挙結果を受けて一〇月に誕生した三党連立新内閣は、首相を除く閣僚が男女同数になった。ノルウェーのクオータ制がいかに社会に根付き、効果を発揮しているかがわかるだろう。

## 市民の受け止め方は

オスロについた翌日は、投票日を二日後に控えた最後の週末だった。市のメインストリートには、「スピーカースッペ」と呼ばれる色とりどりのかわいらしい「選挙小屋」が並び、各政党は「最後のお祝い」に懸命だった（日本のような大音響の名前連呼型では、もちろんないが）。候補者が演説し、まわりに一般市民も交えた小さな討論の輪ができて「おたくの政党はこの前の公約を守らなかつたでしょ」と言い合ったり、バキスタンからきたという移民の少年がマイ

クを握ったり、なごやかな雰囲気だ。

いくつかの選挙小屋を回って政党のパンフレットといっしょに配られている候補者リストを見せてもらった。必ずしも完全な交互ではないが、確かに「男女混合名簿」だ。演説の行われるステージでも、パンフレットに並ぶ候補者の写真にも、ごくふつうに男女が並ぶ。

途中で会った、地元紙の編集者だという三〇代の男性は「女性首相が一〇年も政権をとってた国なんだ、もうクオータはいらないよ」と話していたが、二人の息子を連れた三三歳の銀行員の男性は「地域のバランスを考えて選挙区があるのだから、ジェンダーのバランスを考えてもおかしくないでしょ」と明快。選挙制度などを説明してくれたオスロ市長顧問で元市議のシゲール・エステンさん(六〇歳は、長年の議会経験から「ノルウェーでも、男性議員は開発や施設の建設、産業界育成などに、女性は福祉や教育などに、関心の向く傾向があり、議論や政策の多様性を確保するためにクオータはこれからも必要」との意見だ。「福祉政策が進んだのは女性議員の影響だ」と評価していた。

このツアーの視察に協力してくれたノルウェー公共放送の女性プロデューサー、ペンテさんによると、「男女平等」というテーマは過去の話題という捉え方もあって、若い女

性の間にも「もうクオータはいらない」という意見があるらしい。だが、逆に看護職や教師など女性の多い職業分野では、男性側から「男性のためのクオータが必要だ」という声もあるそうで、クオータは、ものごとのバランスをとるための手法として一般に認知されているようだ。

例えば、父親の育児休暇取得を促すための「ファーザー・クオータ」という制度がある。一〇〇%有給で四二週、無休で三年までとれる育児休暇のうち、最低四週間は父親が取らなければならない、というものだ。九三年にこの制度が設けられて、男性の取得率が四%から二年間で三三%に上がったという。

実際、オスロの街で私の目をとらえたのは、乳幼児連れで歩く男性の多さだ。そばに妻がいるわけではなく、男性と赤ん坊の組み合わせ。デパートの多い駅周辺でも、夕方の五時を過ぎると買い物袋を下げベビーカーを押す男性の姿が増える。選挙小屋めぐりをしているとときも、警官が、迷子の男の子をあやしている光景に出会った。「結構な人込みだからママとはぐれちゃったんだね」などと言いなながら眺めていたら、走ってきたのは若いパパ。この日、私はノルウェーの女達が手にいれたものの大きさを実感した。



## 女達の戦利品

だが、私たちはその後、政党や行政の女性たちとのインタビュを通じて、このクオータ制度が、決して「棚からボタモチ」のように天から授けられた物ではなく、長年の努力の結果勝ち取った、まさに戦利品であることに気づいた。政党がこの制度を候補者名簿に取り入れるようになったのは、それほど昔のことではない。六〇年代の女性議員比率は一六五議席中一六人だったという。投票票日をはさんで話を聞いた労働党のインゲ・リーセ・フーソイ議員（四〇歳）や女性局副局長のレーネ・ローケンさん（五〇歳）によると、五〇年代はノルウェーも「女は家庭」という考えが支配的で、女性は教育も満足に受けられなかったという。

だが、六〇年代、日本や他の先進国と同じように世界的な女性運動の波が伝わったとき、ノルウェーの女性たちは超党派で運動を起し、大成功を収めたのだ。七〇年代のはじめ、政党の候補者名簿に有権者が書き込みをして意思表示することにより名簿順位を変えることが可能だった当時の選挙法の盲点を突き、女性たちが各地で連帯して女性候補者の順位を押し上げ、多くの自治体で多数の女性議員が誕生したのだ。

この選挙法の盲点はその後もなく、男性が多数を占める国会で改正されてしまったそうだが、「女の力を示すには十分だった」（ローケンさん）。当時の一部政党間の対立など他の要因も幸運に作用したらしいが、七九年には男女平等法が施行され、七〇年代から八〇年代にかけて主要政党は女性有権者の支持を得ようと、クオータを規約に盛り込んでいった。

この超党派のゲリラ戦法については、オスロの北、ローテンという街のフェミニスト大学で学長を務めるベリット・オーセさんが「女達は秘密結社のように動いたのよ」と、とてもおもしろく話してくれたそう。日程の都合でここに同行できなかった私は、この「秘密結社」の話をあとで聞いたのだが、具体的に誰がどのように組織したのかはノルウェーでも初めて政党の党首になった政治力のある女性であり、今でも様々な分野の女性たちと強い連携をもっているようだ。

### 戦いは今も続いている

一連のインタビュで私が感心したのは、日本の女性からみれば相当に恵まれた状況にノルウェーの女性たちが安

住せず、しかも一定の組織、またはシステムとして運動を今も続けていることだ。

女性議員が増えたとはいえ、ノルウェーの議会もまだ男性中心。意見をまともに聞かなかつたり、知らぬ間に情報ネットワークからはずされることはよくあるという。「女性候補者探しにはいつも苦労しています。ハードな議会活動のあと、枕に顔を押し付けて泣くような夜が続き、『もう議員はいや』と再出馬を断念する人も少なくない」とローケンさんは話す。

民間企業での採用・昇進、保育園の数、賃金格差とそれに影響される年金制度など、問題も残っている。

だが各政党の女性部局が超党派で政策を話し合う女性会議は今も一年おきに開かれるし、労働党では党内外の女性を対象に、政界進出のための訓練講座を二〇年も続けている。そこでは議会での根回しや効果的なスピーチの方法など実践も交えて習得できる。

運動の成果でもあるが、男女平等法にもとづいた独立の監視機関「男女平等オンブッド」も女性たちの運動が行政の一部に入ってしまったものといえないだろうか。賃金差別など、相談や苦情を受けて交渉にあたるのが主な仕事だ。

三代目オンブッドを務めるアンネ・リーセ・リーエルさ

んによると、個人で訴訟を起こすにはお金も時間もかなり難しいとの理由からできた制度だが、持ち込まれた問題だけでなく、マスコミなどで見聞きし、おかしいと思った問題にも自ら働きかけていくという。何度申請しても調停を始めることすらできなかった、どこかの国の「婦人少年室」とは大きな差だ。本人を含めたつた七人（うち一人は男性）の組織だから、決して暇ではないだろうに、「問題の存在を知らせることになるから、マスメディアに顔を見せることも大切。ほぼ毎日、相談内容などについて取材を受けている」ともいう。

振り返って日本ではどうだろうか。私は八七年に就職した、いわゆる均等法世代だ。この一〇年で育児休業法など、女性たちの運動が実った分野もあり、先輩女性の過去の努力の恩恵を感じたことは少なくない。だが、均等法は見直しされたとはいえ、いかに役に立たないかは、不況で実証済み。民法改正もさっぱり。女性議員はなかなか増えない。北京会議には日本からも多くの女性団体が参加したはずだが、学習会などで「エンパワーメント」という言葉がよく聞かれるようになっただけで、そのために必要な「戦う」ということを私たち、とくに若い女性はまだしていないのではないだろうか。

オスロの街ではベビーカーを押す男性を多く見たけれど、オンブツのリーエルさんのところには「皿洗いをしたくない」といつて相談(?)の電話を掛けてくる男性もいるそう。ノルウェーの男だつて日本の男とそう変わらない。違つとすれば、女達一人一人が家庭で、職場でどれだけ戦い、連帯しているかということではないのか。逆にいえば日本でも、一人一人が勇気を出して戦い、連帯すれば得るものがあるということだ。

「日本でもクオータは実現できるだろうか——ツアーの参加者の一人で大阪府議の山中紀代子さんと話したとき、こんなふう語つたのが印象に残っている。「ノルウェーのクオータは女性たちが『クオータを作つて』とただ叫んできたのではなく、超党派で要求を勝ち取ろうとする過程で生まれたのね」。

フェミニスト大学学長のオーセさんからこんな話を聞いたそう。女性の力を見せつけた七〇年代初めの地方選挙のあと、問題になつた選挙法の盲点を改正しようという論議が起きた際、政党内部でも女性たちは抵抗したのだが、党内にクオータ制度を導入することと引き替えに妥協したのだという。「日本の女性はまだ本当の意味で男性と戦つていない。政党の女は政党内で要求を突き付け、政党の外

女性は政党に働きかけないと」。彼女は長い間、ある政党に所属していたから、日本の政党の中で女性たちの意見がいかに取りいれられるのが難しいか、よくわかっているはずだ。私もこれまで取材を通じてだが、そうした苦勞を聞いてきた。それは政党だけでなくどんな組織でも、職場でも同じだ。男が圧倒的多数の組織で「女性として」要求を突き付け勝ち取ることはむずかしい。勇気のいることだ。でも、戦わなければ得られない。いや戦えば得られるのだ、ということ。を今回の旅は教えてくれた。

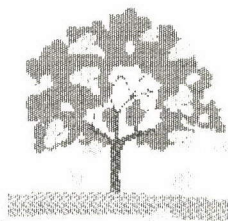
ツアーに参加した仲間たちは、帰国後、各政党や総理府の男女共同参画室へ「政策決定に少なくとも三割の女性参画を求める提言」をもつてロビー活動を行っている。仕事、家庭、地域での活動に忙しい女性たちが、連帯して動くのはまた大変なことだけれども、どんな問題の解決にも政治力は必要だ。実際にクオータが導入されなくても(こんな方法を使わずに女性が力をつけられれば、それに越したことはない)、この「クオータ」が今後、女性が連帯し運動していくための目標、あるいは絆になればいいな、と私は思っている。

(おおわだ・かおり ジャーナリスト)

特集 「先進国」 に学ぶ

## アフリカから考えるー リプロダクティブ・ヘルス&ライツ (2)

草野いづみ



### 民族と無関係に引かれた国境線

タンザニアに一週間滞在した後、アフリカ大陸の反対側、西海岸にあるガーナを訪ねた。

ガーナは一六世紀頃からヨーロッパ諸国が覇権を争い、内陸部から集められた奴隷たちの積み出し港として栄えた場所だ。首都アクラの沿岸には、今でも奴隷貿易のために使われた倉庫（人間用の）がゴミの山のそばに立ち並んでいる。ここから奴隷として送られた人々の数は多い年で一〇万人、アフリカ全土では三百年の間に五千万人にもものぼるといふから、その人的資源の搾取の凄まじさが窺える。

ガーナの公用語は英語だが、約一七の現地語があり、村などに行くとき共通語である英語を話せない人もいる。女性の識字率は五割以下（男性七割強）。タンザニアと比べてGNPは四倍、世界銀行のバックアップで経済開発が進められ、市場経済化が進んでいるにもかかわらず、家族計画実行率が一〇%とタンザニアより低いのは、言語の問題で教育活動が難しいことも一因なのではないかと思う。家族計画指導にあたる看護婦さんが、四つの言葉を使うと話していた。（タンザニアは公用語が英語とスワヒリ語だが、ほとんどの人がスワヒリ語を解するので識字率が高いー九割と言われているー要因になっていると感じた）。

女性の経済力をつけることが

## 家族計画のエントリーポイント

ガーナもタンザニア同様、政府が人口問題を重要な課題と位置づけている。年平均人口増加率三・〇%、合計特殊出生率（女性が生涯に産む子どもの平均数）五・五、妊産婦死亡率二二四（出生一〇万対）、乳児死亡率八二（出生一〇〇対）を全体にもっと減らし、母子保健や国民の健康・栄養状態を改善したいという意図のもとに人口政策を策定。九二年に設置された国家人口審議会が中心となって、家族計画やブライマリーヘルスケア、エイズ予防のためのサービスがもっと簡単に入手できるようなプログラムの実施をすすめている。これらのプログラムは海外の援助機関の資金や技術協力を得て、国内のNGOやコミュニティと協力しながら行われている。

国家人口審議会が人口・家族計画プログラムの実施のためにとくに強調しているのが、「女性・少女のエンパワメント。とくに収入づくり」「家庭生活や家族計画における男性の責任の強調」「一〇代の若者に対する教育」ということ。

この審議会のメンバーとは男性の事務局長以下、女性二名を含む四人と懇談したが、女性はもちろん、男性が「ジェ

ンダーの平等と女性のエンパワメントがいかに重要か」と話していた。とくに「女性の収入の道を開くことがエントリーポイントだ」というのが興味深かった。まさに、女性が経済的自立なしには自分の体の自己決定権を行使できない、ということなのだ。これは本質的に日本でも同じことである。

この審議会は財政省、日本でいえば大蔵省の関連機関で、スタッフは二人の女性も含めて経済畑の専門家が中心。つまり、国の発展のためには男女平等と女性の自立や経済力の向上が重要だと言っているわけだ。ガーナは昔からマーケットマミーという、たくましい物売りの女性たちの活躍で有名だ。しかし「農業労働力人口の五二%は女性で、作物の七〇%を生産しているのに農場経営者の女性は二五%しかおらず、小売商の九〇%は女性なのにセールスマネージャーは九・三%しかない」と人口政策の文書は述べ、問題点を指摘している。実際、村のチーフはみな男性だし（ただし女性が年をとると偉くなり、村にはクイーンマザーという長老の女性もいる）、一夫多妻の慣習も約三割残っている。

ただ、これを何とかしなければならぬ、と政府が考えていることがかつての日本と違う点だ。日本は高度成長期、

経済発展のために女性を主婦として男性労働者の々銃後々に置いて労働力再生産を担わせ、全体の賃金を低く抑えるという家庭政策をとってきた。国連の統計でジェンダー開発指数（女性が生かされているかをみる指標）が多くの開発途上国より下回るのはこのためだ。

### 女性グループによる活発な活動

さて、では実際にどのようなプログラムが実施されているのだろうか。いくつか訪ねたなかで興味深かったのは、女性グループによるプロジェクトだ。

訪れた私たちをいきなり、強烈なアフリカンダンスで迎えてくれた漁村の女性たちは、魚の燻製づくりを収入づくりのプロジェクトとして行っていた。男たちが捕ってきた魚（ニシンの種類）を村の女性たちが総出で露天のかまどで燻し、燻製にして市場で売る。売ったお金の中から三分の二は男たちに原料費としてバックし、三分の一を自分たちの収入とする。このための設備や準備資金は国家女性開発審議会から貸し付けられ、女性たちが少しずつ返済していく。ささやかな収入だとは思いますが、女性が自分で稼いだお金を持つ、という村全体の意識改革に意義があるのだら

うと思った。

もう一つは

「一二月三一

日女性運動」

という全国的

な女性団体の

活動。一二月

三一日という

のは現大統領

がクーデター

を起こした日

だ。その大統

領夫人が会長

を務めるこの女性団体は全国二〇〇万人の会員がいるというから、日本の昔の愛国婦人会のようなものだろうか。彼女たちは村の広場で、子どもたちや女性たちを集めて教育的な劇を上演する。登場するのは、夫が避妊に協力せず、しかも別にもう一人妻を持ったため一〇人目の子を妊娠したまま取り残された女性。すでに大きくなった他の子どもたちは麻葉中毒になったり、真面目に仕事をしなかったり、一〇代で未婚で妊娠したりと問題をたくさん抱えている。



魚の燻製づくりをする女性たち

彼女は最後には出産のために死ぬ、という設定。

この劇には「家をきれいにしよう」「家族計画を執行しよう」「麻葉はやめよう」等のいくつかの「教訓」が織り込まれていて、上演後に見ていた子どもたちにそれを言わせる。その後、避妊器具の現物を見せながら家族計画の指導を行う、という流れになる。男役も全部女性が熱演し、そのコミカルな劇の展開には観客は笑い転げてしまう。

漁村でも女性団体でも、多くの女性たちは教育の機会がなく現地語しか話せなかった。しかしそのパワフルで明るくて元気なものには圧倒された。とくに年配の女性ほど強く、たくましく、コミュニティの中でも力のある存在であることが嬉しい気がした。

### ガーナ家族計画協会が力を入れる男性と若者の教育

避妊や性教育の分野で最も歴史が古く力を持つ民間団体はガーナ家族計画協会（PPAG）だ。国の人口政策以前に、すでに六七七年に設立され国際家族計画連盟（IPPF/本部ロンドン）のメンバー団体となっている。

事務局長はジョアン・O・N・テッテさんという女性で、彼女は生殖生理学が専門で、イギリスのオックスフォード

大で理学博士を取った後、最近までガーナの地方の大学教授をしていた。学校に行っていない少女が多いのでリサーチをしたら、妊娠が原因となっていることがわかり、一〇代への性教育の必要性を痛感したことが今の仕事についての動機だったという。

PPAGでは全国に家族計画サービスを行うクリニックを四六カ所を持つ他、若者への教育やサービスを行うユースセンターを全国一二カ所開いている。また、家族計画と寄生虫予防や栄養など公衆衛生活動を一緒に行うインテグレーションプロジェクトを三四の地域で展開し、ボランティアの地域家族計画普及員が六〇〇人近く養成され、活動している。

ユニークなのは「男性への動機づけ」と銘打ったプロジェクトがあり、男性が家族計画を受け入れ、パートナーと一緒にクリニックに行くなどコミュニケーションをよくするための教育活動をしていること。既婚で子どもがいる男性には「ダデイズクラブ」、未婚の若い男性向けには「ヤングメンズクラブ」をつくり、そこでセミナーやカウンセリング、ゲームなどを通じて性や避妊の知識を普及している。

一方、PPAGは一〇代の少女向けに、経済的自立を促すためのミシンを用いた洋裁教育のプロジェクトも一部の

地域で行っている。この教室の場で、月に一回、クリニックスから指導員が出向いて避妊教育も行うという。一〇代の少女が妊娠して学校をドロップアウトし、教育の機会や自立の道を絶たれることのないよう、実地的な教育を実施しているのだ。ここで用いられている足踏みミシンは家族計画国際協力財団を通じて日本から送られたものだった。リベリア難民の男性がミシン指導にあたっていた。

PPAGのスタッフにしても地域のボランティアにしても、生き生きと働いている姿が強く印象に残った。

### 避妊の選択権とは何か

最近、日本でもやつと低用量ピルの認可が近いという報道がなされている。避妊を目的としたピルが認可されていないのは世界でほとんど唯一日本のみ。また日本では世界中で一般的に使われている銅付加IUD（子宮内避妊器具）もまだ認可されていない。こと避妊の選択肢に関していえば、日本はひどく遅れた国なのだ。

ピルは七〇年代に欧米を中心として世界的に広まり、現在最もポピュラーな避妊法である。日本で当時、ピルが認可されなかったのは、副作用の問題と「女性がピルを飲む

と性道徳が乱れる」という一部の政治家からの声が原因となっている。副作用に関しては、その後三〇年近くにわたってホルモン量の低用量化が進み、もちろん体質や持病によつては飲めないケースや慎重投与のケースもあるが、もはや認可しない理由とはならなくなっている。

現在厚生省がピルの認可をためらっているのは、ピルを飲むとエイズを含むSTD（性感染症）が広がる恐れがある、というものだ。しかし、世界のどこにもエイズ・STDを理由にピルを禁じた国はない。ピルはあくまで避妊のための選択肢であり、エイズ・STD予防にはコンドームの使用などの教育が重要、ということが何の矛盾もなく平行的に進められている。どういう避妊をし、どうSTD予防するかは個人の責任と選択の問題なのだ。

一方の選択肢を一律に禁じることでエイズ・STDを予防しようという発想はない。STDと同じかそれ以上に望まない妊娠は女性の心身の健康を損なうからだ。若くてセックスのパートナーが定まらない、複数などSTDのリスクが高い人にはピルとコンドームを併用し、万一コンドームが破損しても妊娠のリスクは避けられる方法（ダブル・ダッチ・メソッドと呼ばれる）が奨励されている。

副作用の問題にしても、アメリカのクリニックスで患者に



配られるパンフレット等には、リスクも含めてメリット・デメリットがデータとともに詳しく書かれているなど、情報オープンに提供されている。

さて、アフリカの事情はどうだろうか。コンドーム、殺精子剤、ペッサリー、IUD（子宮内避妊器具）、ピル、注射法（ホルモン剤。ノアプラントと呼ばれる皮下埋め込み型の五年有効のホルモン剤も別にある）などほとんどすべての避妊手段（海外からの援助物資として送られている場合が多い）が存在している（クリニックなどの保健医療サービスが足りなかったり、物資不足のために入手が難しい地域もあるが）。

私が驚いたのは、タンザニアでもガーナでも避妊の第一選択はピルとデポプロベラという注射による避妊薬がほぼ同じくらいということだ。デポは三カ月に一回注射を打つことで避妊できるというホルモン剤で、不正出血や血栓症、発ガンなどの副作用が強いとして、アメリカの食品医薬品局でも最近まで認可しなかった避妊薬であり、先進国ではあまり使われていない。かつて、製造元のアップジョン社がアメリカ国内で認可されないにもかかわらず、人口抑制政策をとる国々に国際援助機関を通じて大量に売り、フェミニストたちが問題にしていた薬である。

私は現場で家族計画サービスを行っている女性たちに何度も「危険ではないのか」と聞いた。返ってきた反応を総合すると次のようなものになる。

「さまざまな方法を説明して避妊法を選んでもらうと多くの女性がデポを選ぶ。なぜかといえば、一回注射するだけでいいので面倒なく避妊できるから。ピルは毎日飲むのが大変だし、夫が避妊にネガティブだと取り上げられてしまう。もちろん夫がコンドームを嫌がるケースが多い。他の避妊法だと不確実。副作用も不正出血がひどいとか、問題が起これば恐らくその女性は使うのをやめるだろうし、それ以外はあまり問題がない」。

妊娠・出産による死亡や健康障害がデポのリスクより遙かに上回るこれらの国では（女性の平均寿命が五〇歳くらい。血栓症や発ガン年齢前に死亡する人のほうが多い）これが現実なのだと思う。ピルにしても先進国なら必要な検診を受け、異常がないか確かめながら使うが、アフリカも含めて途上国ではそういう検査設備も不十分だ。タンザニアでもガーナでもピルやデポについて使い方やリスクなど説明の書かれたパンフレットが配られていたが、先進国と比べるとあまり詳しくない。

それでも避妊手段があることによつて女性が多産からま



村のクリニックで、避妊を希望する女性に血圧などのヘルスチェックをする家族計画指導員

ぬがれ、健康を守り、よりよい生活ができるメリットのほうが大きいということだろう。今後、家族計画が普及していくとともに、安全性に関してより関心が払われるようになっていくことを期待したい。

避妊はある意味でテクノロジである。何が適切かの選択はその国、地域、個人の状況によって相対的なものだ。避妊だけでなく薬全般、医療全般がそうだといえる。少なくとも、他から安全だ危険だ有効だという価値観を押しつけられるのではなく、その場所のでられる最大限の客観的な情報を得て自ら選んでいくものであろう。

PPAGが運営する村のクリニックでは、避妊のために

やってくる女性には、どんな方法を希望したとしても、身長、体重、血圧を計り、乳ガン、子宮ガンの検査を定期的にしたうえで処方すると、スタッフが語っていた。

クリニックの壁には、「患者の権利」という一枚のポスター（IPPF作成）が貼ってあった。

「すべての家族計画を求めるクライアントは次の権利を有する。

- 1 情報（避妊に関する情報を得る権利）
- 2 アクセス（性や思想信条や人種や結婚の有無にかかわらず避妊にアクセスする権利）
- 3 選択（避妊手段を自由に選ぶ権利）
- 4 安全性（安全で効果的な避妊法を実行する権利）
- 5 プライバシー（サービスを受ける際にプライバシーが尊重される環境を得る権利）
- 6 秘密保持（個人的な情報の秘密が守られる権利）
- 7 尊厳（敬意をもって丁寧に扱われる権利）
- 8 安楽（心地のいいサービスを受ける権利）
- 9 継続（避妊サービスを必要な限り継続的に受けられる権利）
- 10 意見（サービスに対して意見を言う権利）

（くさの・いづみ フリーランスライター）

特集「先進国」に学ぶ

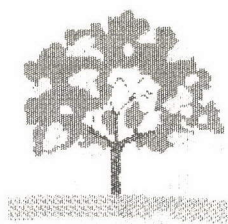
## この世で ただ一人の 特別な人

—カナダで受けた教育

キャロル・ホイ

人は学ぶことが好き

私の故郷バンクーバーの中央バス停留所は、広い公衆便所と古い図書館に隣接しているので、ときに、素晴らしい「人間交差点」となる。暖房つきのビルには、冬となるとホームレスの人たちが集まり、交通の便がいいから、大学生もよくこの図書館で勉強する。大学の新聞部の先輩だったキャシーは、ある日隣の席のホームレスの男性に声をかけられて、当時勉強していたマルクス哲学を説明した。彼は自分の思っていた共產主義との違いにびっくりしていたという。次の日、シェイクスピアの「ハムレット」について論文を書いていたキャシーに、同じ男性が今度は友だち連



れで声をかけてきた。それがきっかけとなってキャシーはホームレスの人たちに哲学や文学、歴史などを教えるようになったという。中には字をあまり読めない人もいて、読み書きの練習もしたらしい。

こうした話を思い出すと、人は基本的にはものを学ぶのが好きなんだという実感が湧く。子どもも本来は勉強好きが自然なのだ。けれども現在の日本の教育制度を眺めていると、つい、この本来の姿を見落としやすい。

カナダは、日本やアメリカより平等な国なのではないかと思う。教育制度を見ても、カナダの高校は成績でふるいかけられたりはしない。労働者も医者もとりあえず出

高校は一緒である。大学も私立ばかりに人気が集まることとはない。カナダの大学の学費は全て日本の国立大学ぐらいである。

「知りたい」「学びたい」という好奇心は、人間のごく自然な欲求だと思う。しかし幼い時から経済的なハンデや能力の違いによる格差などを自覚すると、子どもは自然になれなくなってしまう。お金がないから学ぶ機会が狭まったり、勉強ができないことでコンプレックスを味わったり。これでは人間は好奇心や向上心に素直になれなくなってしまうだろう。そして勉強など嫌いになってしまうだろう。

### カナダの学校制度

カナダはアメリカと同じく、州ごとに教育制度が決められている。そして、各学校の校長と市の教育委員会で学校の方針を作り上げていく。私の住むリッチモンド市は比較的中流家庭の多い地域である。私立に進む学生はバンクーバー市まで通うことになるが、九割が市内に三つある公立高校に進学する。中学校は教会系の私立学校や公立のフリースクールが多く、学生をデリケートに扱う配慮や体制が整っているように思う。まだ自己の未成熟なもつとも悪影響を受けやすい時期を大切にしようという考えであらうか。

しかし、高校になると、ある程度自信を持って他の学生と接触することがあたりまえになっているようで、みんな中学校から試験なしに家から一番近い学校へ進む。同じ学校の中に工業系、商業系、進学系の生徒が入り混じっているが、市内の三つの高校は、校長の教育方針や考え方の違いで、それぞれが特徴を持っていた。

私の通っていたマックネアー校の校長は、大学形式の優れた規則を数多く採用していた。例えば、学生が先生を選び、自分の好きな時間帯の科目を受講する。「科目をちゃんと教えたが先生に選ばれないのではないか」と思う人もいるだろうが、実際には驚くほど偏りなく教師が選ばれる。また先生よりも科目で選ぶことも多いし、どうでも良い生徒は単に都合の良い科目を選択する。大学に進学しない生徒は「楽な」先生を選んでしたが、進学を考えている学生は、自分を成長させるために厳しい先生を優先して選んでいた。そして結局は好きすぎであって、私が「こんな先生絶対いや」と思っている、他の人には大人気だったりもするから、何を基準に選ぶかは各人各様で分からない。

また学問的コース以外のオプション科目の種類が多い。音楽、美術だけではなく、フォトグラフィ、アウトドア体験……。勉強に興味を持たない生徒のために、先生と打ち

合わせをしながら進める個人学習として、数学や英文学のオプションコースもあった。さらに、生徒が自分から作り上げるコースもあった。例えば、私は不器用で音痴なので体育や音楽の単位取得が期待できなかったので、授業についていけない生徒や下級生の生徒を対象とした学生ボランティア教師の制度を利用して、「学生教師科目」扱いとして「ボランティア」でなく、単位を取得できる許可を取った。それは自分で組んだ企画で、学校では私一人がこの単位をもらった。日本の高校では同じような学習レベルの人間同士が入学するから、こういう制度が参考になるとすれば中学校であろうが、自分の立場とは違う視点が見え、考えが広がる機会となる。私にとっては目の覚めるような体験であった。

これは、変わりダネの私立でも何でもなく普通の公立高校での話である。自由にものを選ぶ権利はあるが、反面、ちゃんと出席してきちんと宿題をしないと単位はもらえない。市内の違う高校は、もつとオーソドックスな方針だった。商・工コースの生徒には、就職しやすいようにしっかりと手に職をつけさせる。大学進学を希望する生徒は、やはり自分の好きな分野を捜すため、高校卒論も必要となる。しかし自宅からの距離で高校を決めるような街だから、こ

れほど各学校の特色が違ってても大学の合格率はほぼ一緒である。

### 国語は自分を表現する手段

私の通ったマックネアー校の最大の特徴は国語の教え方にあった。「国語というのは、自分を表現する手段である」というのが教師たちの持論で、そしてそれを育てるために、生徒自身興味を持っていてるものを自分で選択させていた。そういうものこそが一番表現したいものだからだ。また、教師自身が関心のないテーマでは、生徒に興味を持たせることも当然できないからと、各教師が自分の好きな分野をとりあげていた。国語のクラスは、心理学、哲学、SF物、歴史、世界宗教、神話とファンタジー、ユーモアものなどのコースに分けられ、名作といわれる本を通して教える方針がとられていた。

私は勉強が好きだ。それはなにより高校時代の体験が良かったからだと感じている。大学の教授は脳味噌を知識でいっぱい満たしてくれたが、でも私が「脳を智慧の洪水にしたい」と決意したのは高校時代だ。風邪をひくと、学校へ行つて勉強できないのがくやしかった。

私にとって一番印象的で影響を受けた先生は、ガンで今

年の春亡くなったホジンス先生だ。まだ五〇代だった（思  
い出の中の彼はエネルギーが強く、病で弱った  
彼を想像するのは難しい）。英文学の教師だったアラン・ホ  
ジンスは、映画に出て来るような、アクが強く皮肉屋で、  
けれど仙人のような存在であった。学校一徹しい先生とし  
て評判で、「女性は結婚して料理を習うべきだ」と主張する  
彼の第一印象は「最低な男」だった。しかし彼を知るほど  
に、彼の皮肉を理解し本音が分かるようになった。彼は女  
生徒には大学、大学院まで勉強を続けるよう応援する。成  
績を気にしない高卒希望の女友たちが一人いたが、ホジン  
ス先生のクラスだけは頑張つて、今までの人生で初めての  
良い成績を取った。彼は「四大に行く行かないはあなたの  
自由だ。しかし自分は大学へ入学できない」とだけは思  
つちやいけない」と彼女に語った。それほど彼は、成績が  
優秀かどうかとは関係なく、一人ひとりの生徒のことを大  
切に思っていた。

ホジンス先生は、一六世紀英国の、ほとんど知られてい  
ない詩人であるリチャード・ホッカをよく話題にした。リ  
チャード・ホッカは国中で一番醜いとされる女性と結婚し  
ていたが、彼女は頭が良く優しかった。彼は目が悪く人の  
顔がよく見えなかったおかげで、うわべに惑わされずに人

間の本質を見ることができた。そのため二人は永遠に情熱  
の冷めない最高の夫婦であった。ホジンス先生は、「俺のよ  
うな二枚目の男としか結婚しちやいけない」などと口では  
言っていたが、本当に教えていたのは「顔で相手を判断し  
ちやいけないだよ」という人生訓であった。また「先生  
のような貧乏生活をしちやいけない」などと言っていたが、  
彼の人生に対する満足感を見ていると、皆が教職に憧れて  
しまうような人だった。そして「男好き」の私だけは、教  
師になつてもいいという特別許可をもらった。というのは、  
「金のある男を引っかければ教師になつても許す」というの  
だ。

ホジンス先生の影響で「大学では絶対英文学を専攻する」  
と決意した私だが、大学に入つてみて、実は英文学そのも  
のにはあんまり関心がなかったことに、そして、「ホジンス  
先生から学んだのは文学ではなく文学を通しての人生学だ  
った」ということに気づいたのだった。

ホジンス先生はよく、「就職できない博士号の哲学者は、  
何も知らない銀行員よりも幸せな人生を送れる」と言つて  
いた。バンクーバー図書館にいる勉強大好ききのホームレス  
の人たちと、学校嫌いの学生——幸せなのはどちらだろう  
か……。

自分はこの世でただ一人の特別な人

私は高校の教師たちから、〈教えられる喜び〉と〈教える喜び〉の両方を学んだ。私は今でも、毎日のように何かについて思いをめぐらせたり、新しい発見をしたりしないと気が済まない。世界のどこへ行っても、そこが私の「教室」だ。でもそれは私の独特のスタイルであって、同じリッチモンド市内の公立高校を出た姉弟や友たちを見ると、別にそうでもないようだ。ただ、共通して言えるのは、自分が「この世でただ一人の特別な人だ」というかけがえのない自分自身への認識だ。こんな自分への自信を持っていれば、世の中の誰とでも対等に触れ合うことができる。

世界のあちこちを「散歩」すると、自分の脳味噌は中級レベルの細胞でできていることを実感する。それでも、自分より賢かったり、偉かったり、地位が高い人が相手でも、「自分は自分にしかない素晴らしい何かを持っている」という自覚があるから、卑屈になることなく同じ目の高さで話すことができる。そして、どんな人に対しても、「自分より下」と見くだすような感覚もない。

なぜカナダの教師はこのように子どもの個性を開花させる教育が出来るのだろうか。それはやはり、教育に対する意識そのものが日本と違うとしかいいようがない。日本の

教育は軍人教育ともいうべきもので、「我慢、しつけ」をしみ込ませることとほとんど同義である。おそらく現役の教師や校長でも「楽しい教育」などと言われると違和感を覚える人が大多数ではないだろうか。

カナダの場合は民主主義の根幹をなす「幸せになる権利」がいつも中心にある。教育とは一人ひとりが幸せになるための道なのであり、一人ひとりの幸せとは各人各様の生き方、いわば個性の開花ということに集約されるのではないだろうか。カナダのような移民の国では肌の色から習慣から何もかも違う。このように違いがあることが前提の国では日本のように画一化を計ることなどできるわけではない。むしろカナダに問題がないわけではなく、ともすれば違いがそのまま差別となりがちな傾向があり、そのことの解決という課題がつきまとってはいる。しかし一方で、個性を認めない日本の社会では、画一的教育で隠そうとしても自然に現れるわずかな違いによって差別する悪習慣があるなかで、むしろその〈違いがある〉ことこそ大切であるということに気づいて欲しいと思う。

(キャロル・ホイ　フリージャーナリスト)

## フェンスを超えて

小平陽一



ふうー、今日もやっと終わったぜ！  
そうつぶやきながら調理室のガスの元栓を閉める。この時の安堵感と虚脱感、そしてちょっとびりの満足感、おわかりいただけるでしょうか？

幸いなことに調理実習は3、4限に組んでもらっている。後片付けで昼休

みが目いっぱいつぶれてしまう。おまけに5限に授業が入っていたりするから、家庭科は過酷な労働現場だ。だから今日で3日連続、昼食抜きになった。まともにもメシが食いたーい。

調理実習は、生徒は実に喜々として取り組む。そこには、ふだんは見られない目の輝き、生き生き立ち働く姿がある。うまそうな匂いにつられて、たまに他教科の先生が覗きにくるけど、みな一様にこの様子に感心する。

「あの生徒があんなに一所懸命やっている。家庭科ってすごい、家庭科っていいよね」と。でも、こちらは準備から後片付けまでかなりの重労働で、加えて実習中の難問奇問に一つ一つ対応しなきゃならない。そっちの方も分かってよね、と思う。実習が終わると、そのハードさにはしばし放心状態なんだから。

で、すべてが終了してガスの元栓を

閉めるとき、気持ちの緊張の糸をゆるめ、疲れた自分の体をいたわり、実習中の彼らの満足そうな顔を思い浮かべ、てちょっととした快感に浸るんだ。

それにしても、なぜ、理科には実習助手がいて、家庭科にはいないんだ。元理科教師の経験をおまえて言うとう理科の実験と家庭科の実習を比べれば、これはもうはるかに、絶対的に家庭科の方が負担が大きい。

やっぱり家庭科が軽くみられてきた歴史なんだと思う。それは、長らく女の教科だったからであり、また、家庭科の内容が工業や大量生産には直接結びつくものでなかったからなのだと思う。あるいは、専門性という問題もあるのかもしれない。いずれにせよ、これまで家庭科が、正当な評価を受けてこなかったことには相違ない。だってこんな理不尽なことはないのだから。

(こ)だいら・よういち



## 私の家庭科



大場広子

私事ではありますが、昨年九月に高齢の上、三〇時間の微弱陣痛の末、吸引分娩という予期せぬ形でスッポーンと女の子を産みました。その産前休暇と一年間の育児休業は、私にとって「人生最大の日曜日」であり、思い切って「人生の棚卸し」ができた素敵な日々でした。

同期の家庭科教師たちは既に一人か、二人の子育てを一段落させ、私だけがシングルで、職場でも中堅であり、高教組では家庭科男女共学推進委員長の立場にあり、プライベートな部分を省みる余裕もなく三〇代前半を生きていました。「このままシングルでもいいかな……」。しかし老いた父や祖母を一人で看るのは限界があるし、自

分の老後も自分で何とかしなくては……」。そんな悩みを抱えてスウェーデンへ、福祉・生活・教育を視察するツアーに参加してから、私の中で何かが緩やかに溶けはじめました。

その後、この『We』を通して知り合った現在の夫と結婚。たまたま東京の人であったため、別姓・別居・別会計のマイペース夫婦ができあがりました。三カ所でパーティーを開き、たくさんの方々に祝っていただきましたが、そのうちの一回は、東京・小金井市の「くじら山下原っぱ」での楽しい手作り結婚式でした。

社会的な儀礼(?)を立派に果たしたことで、校長も、

(届け出をしていないので)「内縁関係」にあることを認めてくれました(共済組合の届け出用紙には、事実婚の欄は無いのに内縁関係の欄があるのです)。そのおかげでしっかりと祝い金をいただき「内縁関係ふとん」を新調できました。

そして、妊娠が発覚(！)したのが昨年一月。実感のないまま仕事の調整をどうしようか、ちゃんと産めるのか、どうやって育てればいいのか……と不安におののきながら、雪道で転ばないように、体を冷やさず、無理をせず、校内をいつもの調子で走らないように、注意しながら少しずつ妊婦の生活に慣れてゆきました。夫は毎日遠距離電話で様子を気づかってくれ、休みの取れる日には飛んで来てくれました。

折しも四月から二年生は保育領域の授業。今日の体調は、病院の定期検診で感じたこと、驚くほどビッグな妊婦パンツを買ったこと、マタニティ・スカートは足下が見えなくて不安なので、妊婦用のゴム入りスパッツを通販で買い揃え、いかに冷やさないかを工夫しているか、動きが不自由になって感じたこと等々、話題に事欠くことなく、リアルな授業ができました。特に(男女にかかわらず)生徒が優しく、重い物を持ってくれたり、声を

かけてくれたり、お腹を触りたがったり……。

しかし、もし障害のある子どもが産まれたらどうなるのか。その前段として胎児診断をどう考えるか。優生思想の背景にある障害者軽視の状況を取り上げ、「母体保護法」の成立を見守りました。医療任せにすることなく、女性の体に備わった自然の力に従って自由な姿勢で産める「アクティブ・ベース」を実施している助産院での出産を、なぜ選んだのかを語り合ったりしました(が、結果ははじめに書いたとおり)。

一学期の成績を出して産前休暇に入りホッとしたのも束の間、高教組の仕事のバトンタッチで妊娠中最大の「ストレス」を乗り越え、東京への引っ越し、猛暑の中での歩け歩きの生活。すぐには仕事が頭から離れず、前年度やりつ放しだったグループ・プロジェクト集を冊子にまとめ上げるための原稿の整理を終え、印刷を依頼したところで陣痛の朝を迎えました。

その後の東京での一年間は、瞬く間に過ぎ去り、子育ての楽しみと苦勞を思う存分に味わいました。その間、民法改正の国会審議が見送られ、わが子の出生届は①嫡出子・非嫡出子のチェックをしなかったことと、②事実

婚では父親の氏名は記入できないこと、③「届出人」も婚姻していないで産まれた子どもの場合は母親がすることになっており、事実上の父親が出したければ認知届けを出しても「同居人」が出したことにしか扱ってもらえないとの理由で受理されず、一旦考えることにして夫はそのまま持ち帰ってきました。

事実婚で子どもが産まれた場合、一旦婚姻届と出生届けを出してすぐに離婚届けを出すカップルが多いようですが、私たちはそれも含めて三カ月ほど悩みました。そのうちに、扶養認定の手続きは戸籍抄本が必要で、それができないために医療費を全額負担しなければならなくて大変になってきて、子どもの生存権や幸福権にまで影響することになり、ついに三人で法務局まで出かけ、事情を説明して、「民法改正を急いでほしい」と訴えてから、妥協しました。戸籍上ではありますが、私は未婚のまま子どもを産んだことになりました。この場合、父親が認知しても母親の姓しか名乗れず、残念な結果になってしまいました。なぜ出生届が三カ月以上も遅れたのか、なぜ父親と名字が違うのか、いつか本人にもきちんと伝えたいと思います。「へえー、そんな時代があったの?」と、笑い話になる日は遠いのでしょうか、近いのでしょうか。

育児休業が明けて教育現場に戻ってみると、すっかり私は「先生」ではなく、「普通の人」になっていました（「おばさん」とは、言いたくない）。それは私にとってはとても大切なことで、嬉しいことでした。何よりもいろいろな家庭で育ち、いろいろな悩みを抱えている、生徒の立場に立ちやすくなったことが驚きでした。それは、母になったからではなく、いろいろな、普通の人々の中で、教師という鎧を脱いで生活できたことで本来の自分を取り戻せた、という感じ。この感覚を退職する日まで失わぬように、側にいる家族に見守ってもらいたいと思います。

そうは言っても、二回ほど給料日を迎えてしまうと、「いい授業」をするのに必死になっているうちに、この数年間の自分の人生での出来事を度々授業で話して教材にしている自分に気づいてしまいました。ちよつと嫌らしいくらいに……。そのことに気づかせてくれたのは、生徒の冷静な目でした。ジェンダー・フリーな生き方を考えさせるために、自分の娘の名前は男女どちらでも使える名前をつけてもらったこと、女であるがために抑圧的な嫉をするようなことはしたくない、できればスカートをはかせないで育てるつもり（ちよつと口が滑った）、

と話したところ、「それは親のエゴだ」と指摘されてしまったのです。次の授業で私はそれを素直に認め、おかげで、娘には彼女が選ぶ彼女の人生があることに気づかせてもらったことへのお礼を言いました。シングルの頃には、自分を語るときにはかなり神経を使っていたはずなのに……。

個人的な体験を教材化するには本当に伝えたいことを見失わずにやる必要があります。それを忘れれば、ただの自慢話か、昔話か、考への押しつけになってしまいます。それでも、教師自身の生活観や問題意識が、これほど授業に反映してしまう教科はないのではないのでしょうか（また、逆も真かも……。家庭科教師ではなかったら、今のような暮らし方をしていたらどうか……）。

「人は自分に足りない答えを追い求めて生きてしまう」正確では無いと思いますが、昔観た映画の中で聞いた台詞を思い出してしまいました。

……この続きは、何時か何処かで……。

（おおば ひろこ・山形県立酒田西高等学校）

投稿  
募集中!!

新しい方の投稿をお待ちしています。自分のスタイルで、「ご自由にお書き下さい」。

「私の家庭科ラフスケッチ」(5000字)は、「こんな授業をやってみてはいかが」という一年間の授業案を軽いタッチで紹介しています。「授業風景ー風がわかる、匂いがわかる」(5000字)では、生徒の姿や生徒とのやりとりを中心に、家庭科の授業が生徒にとって、どんな場、どんな機会になっているかに焦点を当ててライブ感覚でお伝えしています。「論争」は字数を問いません。共学家庭科をめぐる問題提起でも、それに対する感想でもどんどんお寄せ下さい。

お薦めの教材や資料がありましたら編集室あるいは「楽市楽座」の加藤昭仁さんあてにお知らせ下さい。

また「家庭科相談室」は、首都圏家庭科編集室のメンバーが隔月の編集会議でワイワイガヤガヤ話し合っって家庭科教師の悩みにお答えします。編集室宛に「悩み」をお寄せ下さい。そして「出ると元気になる」編集会議にぜひご参加下さい。次回は12月13日(土)午後3時からフェミックスにて行います。家庭科に興味のある方どなたでも大歓迎です。



## 『食生活』をめぐって

— 五感への信頼を回復させたい

…………… 入江一恵

はじめに

最近「食教育」ということばをよく耳にするようになった。自立の基本として子ども頃から食に対する学習が必要と、女子栄養大の香川芳子さんや評論家の木本教子さんがフォーラムを開いたり、ニュースレターを発行している。また、関西の料理研究家坂本廣子さんは「一歳から包丁を——台所育児」を提唱、神戸の聖ラファエル幼稚園で調理を教え、子どもたちに触る・作る・食べる体験をさせ注目されている。「We兵庫の会」の吉田清彦さんが各地の公民館で開催している「家事としての男の調理」は定員をオーバーする盛況と聞く。

やめられない清涼飲料、とまらないスナック菓子の中・高生には、さらにその必要度は高いだろうし、成人病への不安を抱きながらも外食とコンビニにおまかせの食生活を続ける学生、単身赴任者は？と気にかかる。最近では増加するひとり暮らしの高齢者に自立の食教育の必要性が緊急の課題として浮上し、まさに世は「食教育」を避けて通れない感がある。

しかし、私の中には「人間が生きるための基本的な営みである食を食べること々がなぜ？」という疑問がふくらんでくる。自分の手を使わなくとも簡便に食べ物が口に入る食環境、食べることをついでのこととして片付けて

いる日常性、そして作ることから疎外されていた男たち……。こんな状況では仕方ないかと思う一方で、かつてヒトは野生動物としてもっとしたたかではなかったかという思いも強い。「ヒトは動物であることを忘れるとき、食べるといふもつとも基本的な、そしてもつとも動物的な行動さえ、その意味を明確に把握できない状況に陥っているのではないか」という島田彰夫さんのことは、「食と健康を地理からみると」農文協がひっつかかってくる。

### 「地球家族」(フォトランゲージ版)を使って

本誌の読者の中にはご存知の方も多いと思うがERI(国際理解教育センター)から発行されている「地球家族」(フォトランゲージ版)は、環境教育、開発教育のための教材として開発されたものである。世界三〇カ国の人々のふつうの暮らしを見るために、家の前に暮らしの道具を並べ、そこに家族がいるといった写真である。「自然環境」「家族の表情にみる多様性」「道具と人間のかかわり」「豊かさへの問いかけ」「文明の進展により得たものの失ったもの」などさまざまな観点から話し合うことができる。

・緑の自然を背に食べるための生活用具が並ぶ西サモア。デンと座った家族それぞれの存在感に圧倒される。

・水牛、鶏が庭先に人間と共生するタイ。  
・日干し煉瓦と泥壁の住まいの上に漁網や農具、うす、きねなどの生活用具のすべてが並ぶ子だくさんの家族はアフリカのマリ。

・ゲル(移動式テント住宅)の中のテーブルの上には食べもの満載、羊も家族の一員のモンゴル。

・伝統的な家具、生活を楽しむための道具のヨット・楽器なども多く、手づくりのケーキが食卓に並ぶイギリス。

・物が所せましと並ぶ日本の住まい。家財道具に埋もれた人間が小さく、特にボツンと離れてテレビを見る子ども影がうすい。食のための電化製品のポット、炊飯器、トースター、電子レンジが荷物の中に雑居。食卓の上に赤いりんごが二つ。

撮影者の意図を差し引いたとしても日本の家族の写真には少なからず私自身ショックを受ける。日本の写真だけはカラーコピーで増し刷りして各班の枚数だけ用意し、他の国の三枚と合わせて四枚セットにし、短大の「食生活論」の授業に使ってみた。テーマは「人間と食のかかわり」。学生の感想は、

・食べものも調理する道具もなく、車の並んでいるイスラエルの家族はどこで何を食べているのだろうか。

・ いままで貧しいと思っていた国の人たちの何とおおらかな表情。食えることが暮らしの中心みたい。

・ タイの家の庭には日本の昔話に出てきそうな籠があった。

・ 日本の子どもにも未来はあるのか。何だかさびしそう。

物に押しつぶされそう。

・ 貧しい国、豊かな国とそんなに簡単に振り分けられるのか。

次々と出てくる感想を聞きながら彼女たちの豊かさ観

も少しゆらいだかに思えた。そこで「あなたの住みたい

国は」と聞いてみた。大多数の手が「日本」にあがる。

「なぜ」——「便利だから」。いっぺんに肩が落ちた。便

利な世の中の落し子たちのホンネはやつぱり……。

## 簡便化と味覚の画一化

そのあと授業は、「人類の歴史は飢餓との闘いであった」「日本も六世紀以降五〇〇回にわたる大小の凶作により飢饉、疫病との闘いであった」に続く。

確かに物質文明の発展は人々を食べ物を獲得するために一日のエネルギーの大部分を費やすことから解放した。居ながらにして世界の食文化を享受することも可能にした。しかし、「食」が土と農業から工業へと移りはじめた頃から人間の体に異変が起きた。島田彰夫さんは

この現象を「文明化の進行は人類に生活の余裕と文化の発展をもたらしたが、食々々に対する本能的な感覚を失わせるはたらきをも同時に果すことになった」と説明している。また、日体大の正木健雄さんは「子どもの体は蝕まれている」で「ヒトは進化によって獲得したものを近代化の中でひとつずつ獲得の新しいものから失いつている。例えば自閉的傾向、手先の不器用さ、背筋の弱化、扁平足……」と衝撃的発言をしている。

私は私なりにこのことを次のようにまとめた。「いわゆる人間の高等感覚といわれている視覚、聴覚はますます研ぎすまされ、優れた芸術作品が生まれているかもしれない。しかし、生まれながらにもっている触覚、味覚、嗅覚が萎えてきているのではないか。特に食の簡便化の中でもたらされた味覚の画一化はかなり深刻である」と。

かつて高校家庭科の食生活の授業でインスタント食品の利用について、々できるだけ食べない方がベター、もしとるならば野菜や卵を加えて食べるように々の指導がなされていたのを思い出す。栄養的にはたとえ補完されようと、一つや二つの食品を加えることにより、例えばインスタントラーメンの味は変わることなく舌の味蕾に

までしみこむことである。こうしてインプットされた味は容易なことで忘れない。私たちの味覚は生後半年くらいから発達しはじめ、五歳までにその七〇〜八〇%が定まってしまうと言われる。従って幼児の食生活の大切さと言うまでもない。子どもの誕生日に精いっぱいのごちそうをして子どもの友だちを招待したところ、々なんにも食べるものない々と〇〇のノリタマのふりかけとのりの佃煮ですませたその子を見て、がっかりするということより何か悲しくなつたと話したおかあさんがいた。

### おいしさの追究

既製服を身にまとい、規格化された建売住宅に住む私たち。なぜ食生活にだけ味覚の画一化と神経をとがらせるのか——それは食教育によって食生活を改善しようとしてもこの味覚のバリアにおつかりお手上げになることが多いからである。

人は誰でもおいしさを求め、そこには味覚が決定的な役割を果たすことになる。工場製品も多くの訓練したバネルによって食味テストが繰り返された結果の製品である。消費者のニーズをリサーチし、減塩指向の時代とあって塩分濃度は低くする。それでも食べやすくするため

には濃厚な旨味と香辛料で食欲をそるようになっている。そこには自然の食品がもつ香り、味をひき出すこととはほど遠い結果が出てくる。調理以前の問題として食材そのものが香りを失っていることも一因であろう。

この濃厚な旨味がクセ者である。いったん居座ると天然のものはすべてク水くさいクと感じるといふ、麻葉のような存在である。ここからの脱却は、ほんものの味を出す体験を繰り返すことである。体で覚えること、累積的な結果が美味とつながるまで——。しかし、おいしさは厳密な意味で旨味だけで完成するものではない。塩・甘・酸・苦味を加えて五味調和といわれる。さらに触覚を刺激し、滑らかさ、固さを決定する食べもののテクスチャー、香り、色彩と雰囲気、食べる人の精神状態まで含めた総合的なものである。

ここまで考えてくると、食べること、おいしさを追求することは心が温まる楽しいことではなからうか。現在私に関係している宅老所のお年寄りたちの味覚はなかなかしたたかである。年令的には塩分などの味覚は減退期にあるはずであるが、ほんものの味をきっちり見分ける力もっている。自分の感覚が信頼できること、五感への信頼回復も食教育のテーマにしたい。



「とにかくぶつ殺す！」

「鶏は秒殺（生徒たち曰く、一分もかからず即死させるという意味）だ！」

前回のつづきです。最近授業が荒れぎみのあるクラスで、鶏を食べる実習への抱負を書かせたらこんな調子の生徒が何人かいました。

「おれに首切らせて」

「首切って走らせるべ、そのほか、血抜けるって爺ちゃん言ってたぞ」

こんな雰囲気です。でも……とよからぬことを考えてしまいます。

マスコミをにぎわす動物虐待や「神戸の事件」などが脳裏にうかびます。

「いいか、殺すのが目的じゃない！食べるために、命を絶つんだぞ」

うまくできてないとはいえ、十分時間をかけて、生きた命を絶つ意味を精いっぱい伝えてきたつもりですが、彼らは私の思いとは違うとこ

ろに興奮し、実習を楽しみにしている様子でした。

そして当日、いつもは時間が過ぎからダラダラ集まるのに、その日、

## 潮風荒く

江口凡太郎



## オホーツクの

彼らは休み時間のうちから裏庭に集

まりました。

「まず、やって見せるからよく見て

くれ」

箱からデモ用の鶏を出しました。

バタバタバタ！鶏は当然、大暴れました。すると生徒も大騒ぎ。

「ウオー」

「トリでけえぞー」

「マジこれ喰うの？」

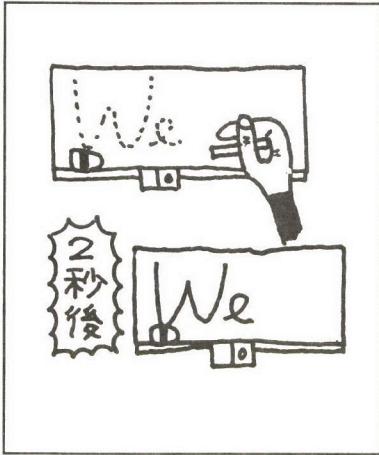
健康的に飼育された雄の地鶏は体格もよくパワフルでした。彼らの前回までの勢いはいっぺんに吹き飛んでしまいました。鶏の予想外の強さに圧倒されたまま、おっかなびつくりの作業が始まりました。とどめをさすのに押さえ方が中途半端で鶏も大暴れ、彼らは四人がかりでやっとの思いで鶏と格闘していました。

（授業後の感想の一部です）

「ぶつ殺すとか言ってたけど、いざ、鶏を見たらびびってしまった」

「鶏は意外にでかくて、すごく暴れて困った」

（次回につづく／えぐち・ばんたるう）



## 👉 「浮き出るチョーク」

(作り方&使い方)

フツウのチョーク（ダストレスチョークは×）を消毒用アルコールに15分位つけておくだけでOK。黒板に字を書くと、書いてから2秒後くらいに、なんと字がポワァーと浮き出してくるのです。あら、不思議！（色チョークがキレイですよ）

## 「なみだくじ」 👉

(作り方&使い方)

ポテトチップスなどの筒状の空き箱のフタに小さな穴をあけ、中に割箸（クラスの人数分の出席番号を書いたもの）を入れておき、授業中に生徒を指名する際などにこのくじを引いてあてていきます。突然の指名にもかかわらず、生徒たちはなぜかみんなニツコリ。



## 👉 「ピンポンブー」

(使い方)

東急ハンズで980円（電池別売）で売っています。ちょっとした質問やチェックテストなどの解答のときに利用すると便利で生徒たちに受けます。

◎「おしゃれ工房」(NHK教育 月曜・火曜 21:25~21:50)に山田邦子さんの弟子?生徒役?として加藤さんが出ています。ぜひ見てください。放映予定は12月8日・9日、1月19日・20日、2月4日・5日です。(編集部)



## 楽市楽座

加藤昭仁



### 「三種の神器」の巻

社会科での非常勤講師として、初めて赴任した高校では、最初授業にならず困ってしまった。マンガ、ウォークマン、私語、居眠りは当たり前。中にはお菓子や弁当まで平気で食べ始める生徒もいたりして、もうまいったって感じ。

その上、当時の僕は「注意することも管理だ」なんて思っていたものだから、まさに教室は無政府状態だった。そんな中、こっちも何とかしようと必死にならざるを得なかった。とにかく、あさっての方を向いている生徒たちに、ちょっとでもこっちを向いてもらえるよう、なりふり構わず何でもやった。

授業の中身はもちろん、それにプラスして演出（小道具）にも凝ってみた。

あくまでプラスアルファとして始めた演出だったが、これが（こっちの方が？）意外な威力を発揮してくれたのだ。例えば、『浮き出るチョーク』。時間差で黒板に浮き出してくる文字に、最初4～5人が「何それ！」と反応すると、マンガ君やウォークマン君もこっちを向き、一様にきょとんとしたり、ビックリしたりして、「ギャー、マジかよ」「またカトー変なもん作ってきて。それどーやって作んの？」なんて生徒たち黒板に釘付け。「へへ。欲しい人には、後でこのチョークあげるね。さあ、ノート出して……」なんて、変に注意なんかしなくても、いい感じで授業に入っていたもの。

教室に小道具を持ち込むと、まずそれだけで（教室の）空気が華やぐし、それに何より、それをめぐって、教師と生徒、生徒と生徒との間に、やわらかいコミュニケーションが生まれ、お互いの気持ちがほぐれたところで、授業がスタートできるのです。

（かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭）

◎このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからのク掘り出し物ク（教材や教具、本、ビデオなど）をお待ちしています。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局：加藤昭仁までお便り下さい。（〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869）

かるゝい  
家庭科相談室

「静寂が欲しい」の巻

U 私ね、自分が実感のある言葉を言っていないって、この頃つくづく思うようになったんだよね。だから、授業でも言葉発しないで作業することのほうがかうんと楽しくなっちゃって。

A それ、「やるべきことから逃げちゃっている」というふうに思わないで、「いまはこれが楽しい」というふうに思っていないんじゃない?。

O 実感のない言葉をしゃべるくらいだったら黙ったほうがいいというのは、すぐわかるよね。

A そう、静寂がほしい。静寂の中で開く五感を通して感じることで、大事よね。

H なんか、でも……。

A 遠慮しないで言ってみて! (笑)

H 僕はさ、もっと(具体的な言葉

をしゃべりたいと思って社会科から家庭科の教師になりたいと思ったのに、それがこう、家庭科の人たちに「言葉はもう苦しい」なんて言われると、もう行くところないって思うんだよね。家庭科は遠くから見て「希望の星」だったんだけど。

A 学校というのは言葉という記号を介して成り立っているんじゃない? そのこと自体が破綻しつつあるんじゃないかと思うの。いくらいい言葉を発しても、みんなにストンと落ちないんだよね。かえって複雑にややこしくしてしまっている。学校って、もっとシンプルになるべきだと思う。シンプルって

何かというと説明できないんだけど。大人も子どもも、もう言葉を介在させることに疲れているんじゃないかな。

T 感性と感性のふれあいで関係が成り立っていたのに、最近、討論して目的がわからなくなることがよくある。何か起きたときに親も子どもも、ものすごく学校に文句言ってくる。学校に対して甘えてくるのね。生徒が「てめえ、この野郎」と言って同僚に詰め寄ってくるから、私が間に割って入って止めて廊下に引きずり出して、ということしているんだけど、テキはそうやって止められることを見越して詰め寄ってくる。「あれ、相手にしてもらいたがっているのかもしれない。無視しちゃったらどうするんだらうね」という話もしているくらい。目的からはずれて、ただ欲求不満の解消になっていく。「教師がてめえと言っているのか」「嘘つくな」とか言ってくるし、詰め寄

られた教師のほうも「僕はそんなこと言っていない」の一点張り。

○ 発した言葉だけにこだわるのね。

T 教師が「煙草吸っているんじゃないか」とひとこと言うのと、「そんなこと言われて疑われて、それでどれだけ子どもが傷つくと思うか」と言ってくるのね。ふだん個人対個人で触れあっている子は、「あんた、もしかしてセブンスター吸っているんじゃないの?」「え、なんでわかるの?」「せめてマイルドセブンにしたら」というような会話ができるのだけど、関係ができていない子は、教師というだけで教師は子どもを傷つけるといって先入観でくる。もつとそうじゃない部分で触れあいたいんだけど、言葉尻だけを捉えられてしまう。

○ 傷ついたと言われたらどうする?

T 「傷ついた? じゃ、ごめんね。私、傷つけたと思わなかったし(全員爆笑)。A君にも、マイルドセブンにしろって

言ったけど、それも傷つけたことなるのかしら」「そうだよ、そうやって知らないうちに生徒を傷つけているんだから」と言うから、「じゃ、彼にも謝るね」。でも、A君に謝ると本人は忘れていて「え、なんのこと?」。

Y そう言ってくる子って、きつと教師に傷つけられてきた歴史が長いんじゃない?

T 父親がすごく議論好きで言葉尻捉えるのが好きなこともある。以前、私の言葉を逐一目の前でメモする人いたの。「何日何時何分に先生は彼に対して馬鹿野郎と言ったと息子が言っている」とか、ワープロの文書がすぐ校長の所に来る。その子の前の担任は、負けずにメモ取り負けずにワープロに打ち込んでそれに対抗していたらしいけど、私、そういうの面倒くさくてできない。私もそのお父さんに「何月何日この子は先生にこういうこと言われて落ち込

んだ」と校長の前で言われたときびびくりして、「そうですか、私すぐ忘れちゃうんですみません。もしそうでしたらすみませんでした」とか言っていた。そのうち、私がちつともメモを取らないから、だんだんむこうも取らなくなつて、卒業するときはメモ取らないで話ができた。言葉尻捉えられていると言われるから「お父さん、目的は何ですか? 私も彼を卒業させたいと思っ

ているし、お父さんもそう思っ

たら、目的は同じじゃないですか。だったら、いかに協力できるかということでしたら、いけませんか?」と言ったら、むこうもメモを取らなくなったのね。

A きつとそのお父さんはそうやらないと伝わらないことが以前にあったのね。でも私は逆の立場もあった。なんかあったとき、証拠のためにときちんとメモ取っておいた。

○ でも、面と向かってメモ取ったりはしないでしょう。

Ⅰ 私もありましたよ。自分の子にどうしてこういう成績がついたのかというところで面談していたとき、「申し訳ないけどテープ取らせていただきます」と言われて。

○ 言葉にもものすごく重きを置くでしょう。コミュニケーションは非言語部分が九三%で言語部分がわずか七%という数字も出ているし、低く見た調査でも六五%が非言語部分と言われている。言語以外のコミュニケーション、顔の表情や声の調子とかで伝わるものが圧倒的に強い。それなのに、なぜか言葉がすべてみたいみんな思っているでしょ。

Ⅰ 考えてみれば、私なんかも、生徒三三人いるけど、朝から晩までひとつとも交わさない子がいるのよね。授業も言葉がちつとも返ってこないしね。

だから、作業しながら世間話するというのがいいよね。

A そう、井戸端会議ね。あの雰囲気他にはなかなかないんだよね。

U いま、糸紡ぎやっているんだけど、夏休みにやっていた過激な昼メロの話なんか始まるんだよ。主題歌なんか歌っちゃって盛り上がって。

A でも手を動かしてやっていること自体は嫌いじゃないんだよね。いまは、生徒たちもそうだし、私もあんな堅いはずに座って一方的に話を聞かされるのはいやなのね。でも自分が高校生の時は平気でおとなしく座っていたんだよね。その違いは何だろうと思うことがある。

T とにかく睡眠時間がほしいと思っ  
ている子が多い。バイトしているから起こしても起こしてもいびきかいている。バシバシたたくと「うるせえな」。授業つままないから寝るのかなと思う

けど、はじまる前から寝ているのね。

A 生活が急ピッチになっているから。何でも速くなっているでしょ。ほら、エッセイの『モモ』の時間泥棒の話。

○ 何か作業しているときってゆったりするからいいのよね。

K 教師も生徒も上下の関係ではなくなるし。

○ 横並びで適当に距離が置ける関係になるし。

K どう？なんて聞いて回っていると、教師のテンションも下がるしね。

Y でも、バランスが難しいよね。いつもそうだとだらけちゃうというか、時にはテンションが上がる時もあるし。

(まとめ・稲邑恭子)

\* \*

次回編集会議は12月13日(土)午後3時よりフェミックスにて。家庭科に関心のあるかたならどなたでも大歓迎。終了後はWeの会の忘年会があります。

# 論争

## 第四回

家庭科の独自性をどう捉えるのか？

### 家庭科への期待

◎林 立彦

僕は、「家庭科の免許を取った地歴公民科の教員」なのですが、「家庭科の独自性」について、意見を寄せてみたいと思います。ここでは、屋台村に投稿したときの文章に加筆訂正をさせていただきました。

「家庭科の独自性」について、それがあ  
るのかないのか僕にはよくわかりませ  
ん。もちろん教科として扱う範疇はある  
のでしょうか。ただ、家庭科という教科  
があることによって、これまでの学校教

育のなかでふれられてこなかった部分に  
アプローチがしやすいという気がしま  
す。二点あげます。

#### 一、生活の中にある美意識や

自己へのイメージを豊かにする

「エロス」「快楽」「遊び」「センス」「退  
廃」「死」などについて考えること（\*1）

たとえば、「私はどんな人が好きかし  
ら」というタイトルで彼氏や彼女を選ぶ  
基準をあげてもらうなんてどうでしょ  
う。教室版「雨夜の品定め」（\*2）です。  
無記名で何点かカードに書いてもらっ  
て、集計要員を決めて黒板に統計表をつ  
くらせる。あらかじめ、基準項目を出し  
ておいて、集計結果の予想を立てさせて  
もおもしろい。その後で、「近代家族」  
イデオロギー（\*3）の話をして、「個人  
的な好みは時代の反映を受けている部分  
もある」とつなげてよい。のっけから、

「近代家族の成立過程」などとやっても、  
生徒にとっては遠い話でつまらない。エ  
ロスのないところで、性のお勉強をする  
のは少しさみしい。

死についてだったら、「君はどんな死  
に方をしたい？」という質問から入って、  
病死死のことや、老人の尊厳について話  
を進めてもいい。仕事観や生き甲斐に振  
ってもいい。べつに、老人ばかりが死ぬ  
わけではないので、「今、死ぬとする。  
今日までの君の人生に悔いはないか？」  
（\*4）などとおつかないことから聞くの  
も楽しい。

こういう個人的な価値観の問題が学校  
教育になじむのかという疑問は、常にあ  
ると思います。学校がよって立つところ  
の近代産業社会のモラルはここを排除し  
てようなので（集団としての秩序を維  
持するために、この部分にはふれられな  
いという教員側の経験則があることも事  
実です）。でも、この辺をさげているこ

とが、授業を非人間的にしているのではないでしょうか。「エロス」や「死」について、四つに組んで授業展開する必要はないと思いますが、い多少し、足を踏み込んでいいし、それがしやすいのは公民科より家庭科かなと思います。もし、

問題の極端な個人的泥沼化をさけるなら（たとえば、本当にプライバシーに関わりそうな状況があるとか）、教材の視野のなかに入れるなり、文化史として扱うだけでも（次善の策として）ずいぶん違うのではないかと思います。家庭科という科目では、日常の生活を合理的におくことに重きが置かれがちですが、その人なりの美意識や畏れが育まれていない合理的生活には背筋を凍らせるものがあると思います。当たり前のことですが、不便でも滑稽でも、それが自分にとって愉快であればいいことを教えたいものです。（\*5）

こういうフタは現社やHRなどでもと

きおり取り上げますが、クラスによって盛り上がる時もあるし、あきれられることもあるのは、他の授業とあまり変わりません。とほほ。

## 二、寛容の精神を身につける（なじむ）

他者のなかで（複数の価値のなかで）、**自己の価値観を育てる技術にふれること**

たとえば、「アンアン」と「暮らしの手帳」のようなグループにわけて、その雑誌のコンセプトはどこにあるのか（なにを売りにしているのか）議論させてみる。

資料は、特集ページだけでもいい。さらに「その編集コンセプトはどんな人たちに共感を持って受け入れられているのか」とか、「コンセプトを維持しながら販売部数を伸ばすにはどうしたらよいか」など、売る側の立場から考えてみる。

こういうのは価値判断のトレーニングになると思う。私たちが取り巻かれている

商品の「夢」の背景には、それぞれ何らかの企業戦略があることを知った上で、商品とおつきあいすることを理解させたい。（\*6）

なにも知らずに「おいしい夢」を見るのは気持ちいい。このトレーニングは、いろいろ知った上で、なおかつ、「おいしい夢」をみるができる能力や持久力を身につけてほしいからやります（いざずらに幻滅をさそうことや、告発ばかりをもつぱらとする授業のやり方はちょっといただけません）。

また、家庭科は、価値観や知識を注入するだけの授業ではない授業を、ワークシoppのようなやり方で展開しやすい科目だと思えます。友人たちの価値観にふれ、他の人の持つ価値観や欲望の手ざわりを受容する技術を磨くこととか、免疫をつけるなどの作業が家庭科ではやりやすいのではないのでしょうか。生徒個人個人の価値観について「現代社会」でや



るワークシヨップのなかでは、うまく本音をひき出しにくいところがあります。あつかう問題が大きかったり、一般的すぎるのでしょうか。主体性を欠いた正論が幅をきかせて、議論とその後の行動がうまく結びつかないことが多いです。

ワークシヨップの具体例は、他のページにゆずります。(＊7)

僕も、学校での知識の注入は必要だと思いますが、それだけではなくて自分たちの仲間ですらやってみることも大切だと思います。

### 三、個別の事象と全体性の

#### 世界をつなぐ

リアルなものにふれることで、まだ見えていないものに対する想像力を養うこと

僕は、開発教育協議会（南北問題などを考える会）の会員でもあるのですが、

この会は夏に全国研究集会を毎年やりま

す。そこで報告された、所沢高校の柴田栄子さんの「いわしとエビと日本人」(＊8)という実践例がすばらしかったのでご紹介します。僕が、家庭科っていいなあと実感したのはこのときかも知れませんが。

まず、「イワシについて」という詩人長田弘の詩(＊9)の朗読から入る。「イワシはおおげさな魚じゃないけれども、日々にイワシの食べ方をつくってきたのは、どうしてどうしてたいした思想だ。への字の煮干しにしらす干し。つみれ塩焼き……」(＊10)ここで「思想は日常生活のうちに支えられる」という趣旨で、柴田さんの見解が述べられる。次に、日本人がよく食べている魚の種類、イワシの利用状況(八二%が非食用)、輸入している魚の種類と輸出入(図説漁業日書のデータ利用)、エビの輸出国で起きていること(「エビと日本人」利用)(＊10)の学習をする。そして、最後にイワ

シの蒲焼きとつみれ汁の調理実習(イワシの栄養価にもふれる)。

この実践などは、かなりリアルなところからの出発になっていると思います。また、手を変え品を変え、目から鱗の連続で飽きさせない。今日でこそ、NHKで「食卓の王様」みたいな番組をやっていますが(とてもソフィスティケートしたかたちで)、この報告は五年以上も前ですから、やはりエライ。

僕を含めて今日の若い者は、リアルな体験を経験化する段取りを知りません。また、美意識をとまなう手作業に没頭することをしていないから、想像力とか洞察力がないわけです。知識と存在は結びつかないわけで――。

僕は学校の教科指導のなかで、生徒に何らかのリアルな体験をさせるなんてことはとてもできない相談だと思っています。では、なにができるのかと考えたときに、①一つのものをじっと見ることに、

②そしてそのものが背負ってきた文化に少しは触れさせること、③そのものが持つ現在のな意味(存在)の全体性に想いをいたすこと、という続き物の例題をひとつやらせてみるまでいけばその授業は上出来だと思えます。授業は段取りの例を見せる所だと割り切った方がいい。「いわし」の授業は、この例題の一つの例だと思えます。詩から入っていくところが何ともかっこいいです。

学校はあくまで出会いの機会を与える場であり、また、己の身の処し方の初歩的なトレーニングをするところであって、体験とか経験とかいうものはこれは自分でやらないとお話にならないものだと思います。家で料理をしないから、せめて学校で時間をとって楽しく教えてほしいというのは、普通科教育のなかでは、学校に対する過大な要求だと思えます。また、「生徒が好きだから調理実習を増やす」というのも、理由はわからない

いではないですが、僕はあまり賛成しません(もちろん、やれば、僕ものめり込むことでしょうけど)。授業の場が、学習をとにもすることで連帯感を強める役割を持っていることについては、もちろん否定しません。

学校にできることには限界があります。学校にふれてもらいたくないこともたくさんあります。でも、なにかのきっかけを作ったり、価値観の比較をしてみたりという学校の働きには、まだこれから期待するところがあります。新しい科目である共修家庭科には、少しそれができそうな、そんな気がします。

科目の独自性といったら怒られそうですが、離れの実習室でやることが多いので、授業が紛糾したとき「まあいっか」といえそうな匂いのするところも家庭科の大きなポイントです。紛糾した後片付け(教室秩序の再構築)は、自分でやら

なければなりません。

文章を書いてみて、つくづく思いました。「隣の芝生はあおい」ようです。

\* \*

(\*) 遊びについては、中公文庫「ホモ・ルーデンス(遊ぶ人) ホイジンガが古典としておすすめ。ちくま学術文庫「ベンヤミン・コレクシオン(証論集)」も楽しい。日本では、「梁塵秘抄」(後白河院が集めた中世の歌謡「今様」集)が愉快。秦恒平NHKブックスが読みやすい。「遊びをせんとや生まれけん」で有名。

快楽では、ギリシア哲学のエピキュロスが断然楽しい。「私が存在するときには、死は存在せず、死が存在するときには、私は存在しない」などと強がるどころが何とも。ドン・ファン型やカサノバ型の快楽主義とは異なる(エピキュリズムの語源)。

生活のなかの美やセンスについてなら、岩波文庫「手仕事の日本」柳宗悦(民芸

運動の是非は別にしても) や中公文庫「陰翳礼讃」谷崎潤一郎などは読んでおく価値あり。

衣生活での退廃については、角川文庫「モードの歴史」や今でているNHK人間大学テキスト1997/10-12「ひとはなぜ服を着るのか」驚田清一にくだしい(家庭科教師必見。記号論の入門書にもなっている)。

(\*2) 源氏物語「帚木」より。青年時代の光源氏と頭中将ら数名が、梅雨の夕方、いろいろな女性の品定めを不謹慎に語り合う(今日の高校生も修学旅行の夜にこんな話で盛り上がる)。

97年2/3月号の『We』誌上、篠原りえさんの「ダイエット」をとりあげたレポートは、ここにあげた展開例によく似ている。

(\*3) 放送大学テキスト「家庭の経営」原ひろ子、「ジェンダーの社会学」目黒依子に良いまとめがある(大きな書店で

は、テキストだけ売っている)。産業社会での性別役割分業の理念型が示されている。

(\*4) 「メント・モリ」ベストのはやった西欧中世の処世訓で「死を想え」。

(\*5) 角川文庫「方丈記」築瀬一雄訳注(これには現代語訳がついていて読みやすい)。乱世のなかで花鳥風月を叫ぶざるえない鴨長明の虚勢じみた「風流親父」ふりには泣ける。

(\*6) 紀伊国屋書店刊「消費社会の神話と構造」ボードリヤールや晶文社選書「意識産業」エンツェンスベルガーがマスメディアと消費行動の関係を説明した古典。

(\*7) 『We』誌上では、「HELPキー」「ラフスケッチ」「楽市楽座」などにヒントがある。ワークシヨップ(その世界ではアクティビティともいう)については日本ユニセフ協会等からの出版物も多数ある。書店では、教育書か国際関係(N

GO関係)の売場にある。開発教育情報センター(開発教育協議会事務局内)0332078008を利用して書籍の検索も可能(西早稲田にあり。閲覧も可)。

(\*8) 開発教育協議会刊「開発教育23号」に詳細あり。この会の会員に当たった機関誌で、会員には教員、学生、NGO、青年海外協力隊OB、地方公共団体職員が多い。

また、『新しい家庭科We』91年11月号にも授業実践「いわしとエビと日本人」が掲載されている(\*在庫あり。フェミックス編集部)。

(\*9) 思潮社現代詩文庫⑬「長田弘詩集」吉行理恵他。

(\*10) 岩波新書「エビと日本人」村井吉敬。ストレートに授業に持ち込むと、社会的になりがち。岩波新書「バナナと日本人」鶴見良行はとてもよく似ている。これらを使った授業展開事例も多数あり。

## 「ポネット」について

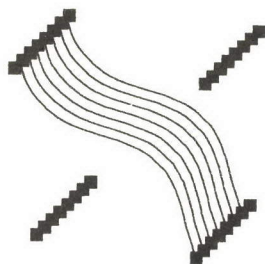
ジャック・ドワイヨンの「ポネット」をもちあげる文章がつづけて朝日新聞に載った。別に悪い映画ではないが、それほどのものとも思わなかった。それなのにこのポネット現象。なんとなく気色わるいぜと、曲がったヘソの奥で例の虫が動く。例のことだからそのままにしておいてもいいのだが……今日は虫の居所がわるい。

「ポネット」を見たのは十月八日。飼っていた犬が死んだ翌日だからよく覚えている。七日は友引で火葬場が休み。やむなく庭の菊や秋海棠を一緒に入れてやった犬のなきがらを一晚家に置き、翌朝火葬場の開門と同時に運びこんで、それから「ポネット」を見に出かけた。

犬のさくらは教師をやめた翌年の冬、二月二十六日の大

雪の日に飼いはじめた老犬である。八重洲口から京橋へと試写会場にむかうぼくの心にはいささかの哀愁があった。

試写会というものが好きでない。一般封切の前に招待客だけが特権的に映画を見、得々と語る、それが試写会だという偏見もあるが、それよりも何よりも、タダとはいえないがらたつた一本の映画を見るためにわざわざ出かけるという、そのことがいやなのだ。もったいない。そういうと、ひとは、選ばれた人間だけが一本の映画をゆつくり見る、それほどのぜいたくはないではないかというかもしれないが、それは見解の相違、というよりも映画に関するニンゲンの出来具合の違いというものの。子どもころからぼくは一本だけ映画を見るということをしたことがない。見る時



は必ず二本立。できたら三本四本とハシゴしてでも見ないとその一日がもったいなくて悲しくなる性分の子どもだった。長じてのちも「よい映画を一本だけ見る」という高尚な趣味はついに身につかなかった。意地が汚いというかケチというか、品性下劣であるなあとつくづく思う。

その上ほくは子どもの映画というのが好きでない。どんなに評判のよいものでもまずは食指が動かない。だから、四歳の子どもがヴェネチア映画祭の主演女優賞をとったなどといったもほくには全くの逆効果でしかなく、ふつうならそんなものをだれが見に行くかということになるのに、なぜ塾の授業を休みにしてまで見るば京橋くんだりまで出かけたかといえ、たまたま回ってきた招待券に付されたチラシのことはがほくの心をひいたからだ。

—— たった四歳で大好きなママの死に直面した少女が、なんとか自分なりのやり方で死と向かい合い、のりこえていくまでの軌跡を描いている、云々。

先の宮崎勤における〈祖父の死〉、最近の酒鬼薔薇聖斗における〈祖母の死〉と、子どもが成長していく途上で遭遇する最も親しい者の死、それが子ども心に落とす深刻な影、といったことについていろいろと考えさせられていたほくは、なるほど映画がチラシのことばどおりならずいぶ

んスリリングなテーマを扱っているわけだ、いったい四歳の子どもがどうやって母の死をへのりこえ たというのだろうか、強く関心をひかれた。

エレベーターを降りるとすぐに受付があり、「ぜひご関係のメディアでこの映画を取り上げてください」とにやかにプログラムを渡された。見ると、写真だけで知っている田中小実昌、赤瀬川隼両氏がソファに腰をおろして話している。ああこういう人たちが来るのが試写会かと妙な感心のしかたをしながら会場に入ると、百人ほどの小じんまりした会場はほぼ席が埋まって、補助椅子も出ている。席を見つけてはと回りを見ると、雑誌社の記者かフリーランスのライターか、若い女性が数人、ボールペンを片手にアンダーラインを引きながら熱心にプログラムに目を通している。映画を見る前にそんな一心に読んでしまっているのだろうかと思議な気持ちになった。プログラムに書いてある内容の方が大事で、映画はそれをたしかめるために念のために見ておくといった気配。この人たちにおいて映画を見るという快楽はどこにどう生きているのだろうか。仕事？ ああ、それならわかる。小説やエッセイを読んでいるにしてもいつも心のどこかに「これ、授業で使えるかな」と

さもしい思いを抱いていた教師時代の自分が苦く思い出された。なるほどこういう人たちによって映画の評判というもの为先導されていくのかと、どうやらこのあたりからほくのヘンは曲がりはじめていたらしい。

人形を抱き、親指をしゃぶっている小さな子どもの姿を映して映画は始まった。その子の腕にはめられているギブスにサインペンで漫画を描いてやりながら父親は、その子の母親が突然の交通事故でなくなったことを説明し納得させようとする。だがその子ポネットには死ということがよくのみこめない。預けられた先の叔母やまわりの子どもたちもさがさまざまなことをポネットにかけて慰めたり教えたりするが、ポネットはひたすら母に会いたいだけと思う。神様をお願いして母親が自分に会いにくるのを待つポネットは、友達と遊ぶ気にもなれない。

男の子が誘う。

「何して遊ぼうか」

ポネットは答える。

「遊べない。ママを待つてるから」

男の子はさとす。

「死んだら死ぬんだよ」

ポネットは抵抗する。

「イエス様は生き返ったもん」

男の子はたしなめる。

「ほくのおじいさんは死んだきり、もう戻ってこないよ」

ポネットは反論する。

「それはみんながおじいちゃんを待っていないからだよ」

それに比べてこのわたしはこんなにママを待っている。だからママはきつと会いに来てくれる——。

このあたりの映画の進み行きはほくの涙を大いに誘った。ポネットのくちびるがふるえ、目にいっぱい涙がたまり、やがてすすり泣く。これほどわたしが待っているのにママが会いにきてくれないのはきつとわたしが悪い子だからだと、ポネットは哀れにも自分を責めはじめた。もうポネットは限界だ。いつその小さな心が破れるか——。

ポネットはどうとう宿舎学校を抜け出し、母が埋葬された墓地へ向かう。小さなリュックを背に一心に坂道を登って行くポネット。ほとんどまともに見ていることができないほどのいたいたしさだ。ここまでポネットを追いつめて、いったい映画はどのような終わらせ方をしようというのか。そう考えてほくはひじょうにこわくなった。どんなへのかえもほくにはイメージすることができなかった。できるのは、ポネットのはりつめた心がかろうじて破れること

をのがれ、《時》が鈍い癒しをもたらす幸運をひたすら願うことだけだ、それしかないではないかと思つた。

ところが――。

ここで一つの《奇跡》がおこるのだが、そのことについてはジャック・ドワイヨンが次の言葉をプログラム冒頭に寄せていて、この映画の肝心なところを語ろうとする者の口をあらかじめ封じる仕掛けになつていたのでつた。

「観客のためを思うなら！ 映画の結末は明かさななくてもいいだろう。最後のサスペンスを大切にするため――。できるかぎりの協力をしてくれてありがとう」

ぼくはこのように《協力》を要請されているのだが、そして新聞に載つた評もふくめ多くの評者はジャック・ドワイヨンの要請にこたえて《協力》しているのだろうが、多くの「ポネット」に対する違和感、また最近のポネット現象ともいへべきものに対する違和感はまさにこの映画の結末、ポネットに母の死をへりこませさせるために《奇跡》をよびこんだそのやり方にこそあるのだから困つてしまつた。これから先は、読みたくない人は読まないで下さいとお断りした上で書きすすめるほかはない。

さて、その《奇跡》というのはいかういふことだ。

母親の墓の前で、素手で土を掘りながら泣きじゃくつて

いるうちにポネットはいつか泣き寝入りをしたのだろうか、その夢に、母親があらわれるのだ。この場面ははつとするほどの迫力があり、さすがにイエスの復活という教え、考え方に馴致された文化圏のもつ想像力の威力を見せつけられるし、母親（マリー・トランティニャン）とポネット（ヴィクトワール・ティヴィソル）が手を取りあつて戯れるそのさまはえもいわれぬ幸福感が横溢して実に美しい。カメラは流麗をきわめ、母親がポネットの背にかけてやるセーターの赤も暖かな草地の色をバックにしつとりと美しい。そして母親は別れに際して「生きることを楽しむこと、それを覚えるのよ」とポネットに語りかけ、ポネットは母の姿を振りかえり振りかえりしながら現実の世界へと山道をひとり戻つていく。母の形見の赤いセーターを小さな肩にまとつて。ぼくは涙ぐみ、カタルシスをえた。ひさしぶりに涙の始末に困つたぼくは、それが乾くのを待つてゆつくりと試写室を出た――。

それなら何を文句を言うことがあるかとひとは言うだろう。ぼくもそう思いながら、「でもなあ、あのラストは反則だよなあ」と心につぶやいた。手を使うことを禁じられたサッカーの試合で、思わずフォワードの選手がボールを手でつかんでゴールに駆け込んだようなものではないか――。

（この項 つづく）

# のき のき 〇んぼ

祭 良産



11月といえば、『亥の子』（いのこ）である。稲の刈りしまいに能勢では、11月「亥」の日に亥の子の神を田の神と信じ、収穫祭として祝ってきた。どこの家でも、ボタモチ（おはぎ）を作り、これを神仏に供え家族もいっただいて豊作を祝う行事だ。『おっさん』（著者）は、子どもの時、山や川で遊びまくったが、「花見」といい、季節ごとの「歳時記」の中でもいろいろ遊んだ。その代表的な行事が『亥の子』である。

米の収穫を祝って、村の男の子たちが、村々の家を一軒一軒訪ねて、獅子を舞って唄い踊り祝儀をもらうのである。

くわいのこの餅や いわいませよ

いのこのぼた餅 いわいませよ

おひつにいっぱい いわいませよ

いのこのぼた餅 いわいませよ

いのこの餅や いわいませよ

ひとつやふたつじゃ足りません

おひつにいっぱい いわいませよ

もうひとつ いおうてかえりませよ

『亥の子』に欠かせないものに「獅子かしら」（米を入れる俵のふた〈さんだわら〉2枚で口および頭を作り、頭を菊の花や「かんざし」で飾り、びわの葉で耳を作り、シシトウガラシで赤い鼻をつける）、「つち」（地面を打つためのわらで作った棒状のもの）、「みの」（獅子役



がみのをかぶる)、「かんざし」(20センチくらいの割った竹に切り紙を挟んで作り、各戸一本ずつ配る)などがある。

当日の配役は、指揮に当たる「大将」、獅子を舞う「舞役」、祝儀を預かる「会計役」、家のカドグチを開ける「開け役」、祝儀をもらう「踊り役」等それぞれ役割がある。唄を唄って、「つち」で地面を打っている間に、獅子は、室内に入って舞ったり踊ったりし、祝儀をもらって帰る。また、獅子に頭を噛んでもらうと無病息災になるといわれている。

秋の夜、透明な大気のなか、ハッハッと白い息を吐きながら、子どもたちがそれぞれの配役の格好をして、山道・田んぼの畦道・村の中の細い道を練り歩く。溝にはまつたり、野壺にはまつたり、梨の木に登って梨を盗んだりもしたことを思い出す。『亥の子』の「だんどり」と運営は大昔から男の子どもたちだけで伝承されてきた。「大将」はみんなから尊敬されるだけの力量を持っていたし、また、みんなのめんどろをよく見ていた。家々からもらった「祝儀」は、役割ごと、縦の関係で分配した。「大将」が即決で分配する。お金の総額と分配率は、「大将」の権限である。

ところが、いつの頃からか「子どもの世界」に親や学校が入り込んできた。「ク祝儀クを平等にしろ！」「子どもにたくさんの小遣を渡すな！」

P T Aとかいう集まりの時、「なぜ女の子は、参加できないのか!」「不公平です」

その場で『おっさん』は言った。「女の子が晩に山あいの道を歩いていたら、山姥に食われる……なぜか?『山の神』は女だからです。乙女にはク嫉妬クします。また、てんご(いたずら)します」。

P T Aのお母様たち、「じゃあ、私たちも参加できないの?」

『おっさん』曰く、「さまになりません。それにお母様たちは、食われません。山姥が寄ってきません。ク嫉妬クしないからです。お母様たちはもう山姥の予備軍ですから……」

「……!?!」

(くわた・よしひこ 豊能図書館館長/題字・版画とも著者)

# 変な子じゃないよね

文-滝野澤直子



イラスト 滝野澤直子

いつも私を叱ってばかりの彼が、私の部屋の台所で慣れない料理を作って失敗をした。どんな失敗だったのか、覚えていないほどささいな失敗。でも、私には待ちに待ったうれしい瞬間だった。「ダメじゃないの」。穏やかに優しく、ほんの少しいつもの仕返しをするもりで言うと、彼はいつになく素直な顔で照れ笑い。出会ったころにはよく見せてくれていた懐かしい笑顔。あの楽しかったところを取り戻したようでホッと私は調子にのった。「だいたいね、こんな余計なもの作らなくなったって

いいのに……」言うつもりもなかったことまでしゃべり出し、ヤバイと感じながらも、滑り出した口はとどまるところを知らず責めたてた。叱られ続け抑えられてきた感情が、ついに出口を見つけてしまったんだ。

彼の表情が硬くなるのに時間はかからなかった。原因もわからないまま、売り言葉に買い言葉で大喧嘩。口では勝てない私は、「死んでやるから!」と部屋を飛び出し、マンションの最上階まで駆け上がった。柵から身を降り出してみたものの、足がすくんで飛び降りられるはずもなかった。

追いかけてなんて来るわけないか。自動車整備工場の音を乗せて、昼下がりの風が髪を揺らす。手すりにもたれて溜息をつく。とても寂しくなった。彼が失敗したの

がうれしかった。私はひとつも変わっていないんだと、自分の性格に吐き気がした。

小さい頃から、人の失敗、とりわけ、人に迷惑をかけられることがうれしかった。だって、そういうときには誰でも罪悪感にかられて優しくなるでしょう。申し訳なさそうに謝って、私が許すとホッとして笑ってくれる。私はオドオドせずには話ができるんだ。小学校の頃、貸した本を同級生が汚したときには、ドキドキするほどうれしかったよ。ほんのちよっぴり怒っているような顔をして、「別にいいよ」って言ったら、その子は心配そうに私の顔をうかがっていたんだ。魔法みたい。いつもは私が小さくなっているのに、この魔法がきいているほんのひとときだけは、彼女が私の機嫌をとることになった。勝ち誇った気持ちと同時に、いずれ引き戻される現実への不安がこみあげて、その苦しさから逃れたい私は、人の気持ちを自分の意思通りに操作しようとするくせがついてしまった。

ずっと、そんなくたびれる駆け引きをしてきた自分がいやで、今度こそは、対等につき合える相手を見つけたつもりだった。でも結局は同じだ。私はけなげな女のポーズをしていただけ。叱られたときには小さくなって、相手のミスにはつけ込んで。弱いふりも強いふりも、やめられたらいいのにな。ただの私に戻って、もっと楽になりたい。

でもどうしても抜け出せなかったんだよ。彼に優しくされるために、私は死をほめかすことしかできなかつた。「どうせその気もないくせに」と彼。そう、本当は死にたくなんてなくて、もっと安心して楽しく生きたかったんだよね。だけどどうしたら幸せになれるのかわからなくて、とうてい幸せなんてつかめそうもなくて、「死ぬ気もないくせに」と軽蔑されたのが情けなくて、もう私にできることは死ぬことだけだと思つた。

死ぬ気になつて頑張れ、と誰かが言っていたけれど、私はもう頑張りがなくなつた。

(たきのさわ・なおこ)

# このままではいけない？

吉原令子



— インターンシップで (3) —

「自分がまったく見えていない」。ロシエールの一言は拘置所にいる男性や女性たちにだけ当てはまる言葉ではなかった。自分が見えていなかったのは私も同じだ。バレンタインの日にバラの花束をもらうために白人の女性のように振る舞おうとする私。陰湿な人種差別にあう度に、なるべく白人に溶け込もうとする私。そして、それが受け入れられない時には私を受け入れないアメリカ社会が悪いと責め罵倒する私。いったい、私は何なのか？

インターンシップをやって数カ月後、PACER (ペース) プログラムにやって来た被拘禁者の女性たちが必ず書くというエッセイ『Who am I? (私は誰?)』を私も書いてみようと思った。紙とペンをもって机にむかった途端、まったく字が走らなかつた。誕生日カードへの一言もレポートを書く時も「えっ、もう書いたの。れいちゃんはいつも早い」とアメリカでも日本でも言われていた私が、いざ自分について書いてみようと思うと何から書き出しているのかわからない。「私は女で、日本人で……」それからなかなか

続かない。そこで、父母のこと、弟が生まれた時のこと、友人のこと、どうしてアメリカに来たのか、今は何をしているのか、などを思いつくまま書いてみた。夕飯も忘れて書いているうちに夜の十一時になってしまった。

部屋の窓から外の景色が見えた。アメリカの夜景は白熱灯のためことなくオレンジ色だ。日本の夜景は蛍光灯なので白っぽい。でも、どちらがきれいとか、優れているということはない。どちらもきれいだ。私の黒い髪の毛だつて金髪より劣っているわけじゃないよ。黒い目だつてきれいだよ。黄色い肌だつてまんなざらじゃない。日本語のアクセントがある英語だけど、私は日本語と英語が話せるよ。私はその時エッセイの最後に「私は自分が日本人の女であることに気づいた」と書いて締めくくった。

「このままではいけない」と思う気持ちの裏側には常に「ありのまま」の自分を受け入れられない私があった。私が日本人の女であるというごく当り前のことに気づいたことは、いろいろな意味で私の視野を広げることになった。アメリカでは少数民族の一員である私も、日本に帰ればマジョリティである。では、日本にいる少数民族はどうしているのだろうか。なぜ、日本の女性は結婚適齢期や年をとることをそんなに気にするのだろうか。日本だつてアジアの国なのにどうしてアジア人といわれると違和感を感じていたのだろうか。そういう質問にひとつひとつ答えることは血を流すように辛い作業でもあった。なぜなら、自分の中に存在する偏見や差別をすべて露呈することだからだ。「私はもつといい人だつたはずなのに……」と何度も繰り返しながら自問自答することはひどく気の滅入ることだった。しかし、膿は一度きれいに出血してしまわないとまたずきずきと痛くなり、苦しむのは私自身である。自分がまったく見えていなかった私に一筋の光を与えてくれたのは、まさに私がこよなく愛していたアメリカであり、ひどく嫌っていたアメリカでもあった。

(よしはら・れいこ 大学講師)

# 日記業の巡の樹森 蔦



蔦森 <sup>タツル</sup> 樹

「とにかく移動し続けている」。そうとうしか言いようのない日常も、はや十カ月目。送られて来たJALの搭乗実績を見たら、ビキニ初挑戦で燃えた沖縄の夏以外ほぼ十日ごとに飛んでいて、ハワイ往復航空券が引き替えられる。ハワイといえばワイキキ。ワイキキといえばトップレスだ。次の目標に向けて頑張ろう！（コラコラッ）

とはいえやっぱり疲労する。でも疲れてなんかいられない。落ち込んでなんかいられないので「たつる、元気だろう！」と自分に言い聞かせているけれど、実際にあんまり効果はない。スローガンってそんなもんだ。

それよりも効く方法を発見したので実行に移している。それは、顔面「ヘラヘラ OR ニコニコ」してることだ。鏡を見てハデにカワイイ顔面修正するのがコツ（覗くとただの不気味な人）だけど、これが結構効く。「何だかいつも楽しそうですね」と人に言われるようになればでき上がり。顔の筋肉が楽し

ければ心の筋肉もつい楽しくなっちゃうのだ。直面した状況とか出来事に巻き込まれつつ、それを笑っちゃえるなんて最高。笑えたら幸せ。なんか修業のようだけど、こんなことをしています。そんなわけで、わたしの講演スタイルもずいぶん変わって来たと思う。先日も、旭川の「ウイメンズネット旭川・一周年記念」講演会でも、笑ってばかりいたような気がする。真剣に話を伝えようと頑張ってしまうと、顔がバリバリになるんですね。そうすると「怖い」とか「顔が男みたい」とか言われてあんまり喜ばれないし、会場コミユニケーションが緊張したものになってしまう。それに（これが一番の理由）頑張った結果が「男顔」なんて言われたら、とても悲しくて辛くて不幸で、泣きたくなります。

だから話ができるという状況は、それだけで幸せであるという点をしかと心に刻みつつ、幸せだから笑っちゃえ！

（つたもり・たつる）

■連載

おんなが

歳をとるといふこと

木村栄



約束をしていた友人が、前日になって行けなくなると電話してきた。

「突然、息子が結婚相手連れれてくるって言うの。寝耳に水もいいところよ。明日でなくても、って言ったんだけど、急ぐ事情があるんですって！」

翌日訪れた初対面の婚約者は妊娠していた。今時珍しい話ではない。問題

はそれから始まった結婚狂騒曲である。冷や汗もので先方の両親に会いに行つた息子が、次は両親揃つて挨拶に行つて欲しいという。レストランで親同士を紹介するのだからと予想していた「口今別居中」の友人は、ぼやく。

「今更体裁を繕うのも嫌だし、そもそも一体私は何しに行くわけ？ お嬢さんをいただきたいって？ 息子の不始末を詫げる？ ヘンよ、そんなの」

母親の困惑をよそに、若い二人は打ち合わせに余念がない。結納だの席次だのと、冠婚葬祭事典をひっくり返しては難問を突き付けてくる。しきたり通りの結婚式を挙げるつもりらしい。

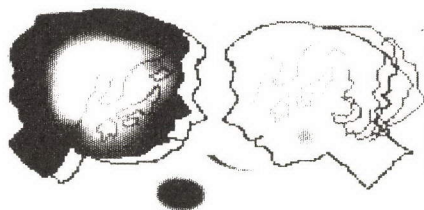
だとしたら、家を飛び出して会費制の結婚式をあげた友人には、教えてやることは何もない。生まれたての民主主義一期生として、その高揚期と多感な青春期を重ねた世代である。非民主的な思想の入れ物である形式や慣習

を否定するのに夢中だった。が、破壊の後に何を創造したかと問われると自信がない。親が葬り去つた「旧習」から伝統の断片を掘り起こそうとしている息子の姿に、壊すばかりで子ども世代に伝えるべき新しい価値を作れなかつた自分たちの不甲斐なさを突き付けられたようだと、嘆く。

ところが、その後若い二人は、考えの違う両方の親と話し合い、三者が納得できる接点を中心にして準備を進め、余分な飾りを排した気持ちのいい結婚式を挙げて、皆に喜ばれた。

「私たちは親は親、自分は自分で割り切っちゃつたけど、結構粘るのよねえ、あの子たち」と、電話で報告する友人の声は、満更でもなさそうである。

壊すだけだったとしても、それが私たちの役割だった。その上に何を作るかは次の世代の仕事なのだ、得心がいったようだ。全く同感である。



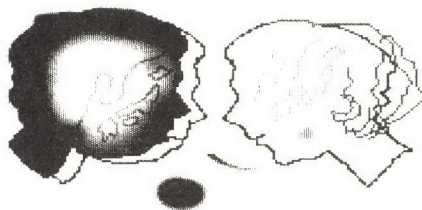
居場所考33 〈北朝鮮から一時帰国した「妻たち」〉……………水田宗子

北朝鮮からの一時帰国が実現して、約四十年ぶりに日本へ帰った人たち（いわゆる「日本人妻」）が、一週間というあわただしい日程の中で、それぞれ郷里で肉親と会ったり、墓参りしたりする様子を、テレビや新聞で見た。

今回の十五人の人たちには、それぞれに固有の歴史と生活の物語があるのだろうか、たまたま新聞で読んだある女性（59歳）の場合は、両親を早くに亡くして、幼い四人の兄弟姉妹はそれぞればらばらに親戚などに引き取られ、中学を卒業して働きはじめながらもお互いにほとんど会わないような生活だったという。そういう中で、彼女は結婚した朝鮮人の夫の国へ行くことを、弟たちにも知らさずに、新潟からの帰還船に乗ったのだった。そしてその弟たちは、姉の一時帰国を機会に連絡を取りあうまで、何かで仲違いしたまま、長い間、お互いに音信不通だった。

約四十年の歳月を隔てて再会し、「あの頃は走りづめで、自分のことに精いっぱい





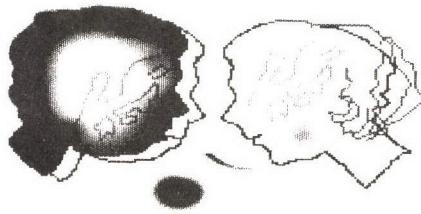
aml

だったから、兄弟姉妹のことまで考えるゆとりがなかった」と語っている、当時十代だった弟たちのことばを読みながら、私は、つい先頃、死刑になった永山則夫のことを連想しないではおれなかった。彼もまた、幼い姉弟四人で飢え寸前の生活を経験していて、中学を卒業後、集団就職で上京した少年が、連続殺人犯となったのは十九歳のときだった。今度、一時帰国した姉とそれを迎えた弟たちは、永山則夫より十年ほど年長だから、日本社会は永山少年の頃よりさらに貧しかった。「あの頃は走りづめだった」という、今、五十代半ばの人の言葉に、私は家族や家庭に恵まれなかった若者たちの、貧乏から抜け出そうとして苦闘したにちがいない日々のことを思った。

北朝鮮と韓国の間では、同じ朝鮮半島に住む同胞同士なのに、朝鮮戦争の混乱の中で南北に分かれた「離散家族」探しや往来さえ、いまだに行われていないという「異常な」現実があるが、私たちは今回一時帰国した人たちの背後にいる約二千名の日本人の存在や、拉致された少女のことを忘れないでいたい。

中国残留孤児の帰国者の場合と同じように、今回の日本人妻の中にも、再会を熱望していた肉親、親族の冷淡さを語った人があった。親兄弟の反対を押しきって朝鮮人と結婚した彼女たちへの世間体の悪さ、困惑、違和感が、いまだに行動を伴う実体ある感情として、人を支配しているのはやりきれないことだ。いや、それはそうした過去のわだかまりだけではなく、貧しい親戚縁者に援助を求められては困るという、現在の感情でもあるのかもしれない。親戚や家族はそもそも厄介なものなのだ。

あわただしく北朝鮮へ帰っていった女性たちが、長年の望みが叶えられたことを喜び、故国に心を残しながらも、北朝鮮で暮らしていることを自分たちが選んだ道だから後悔していない、自分の居場所は向こうにあるのだから日本に帰って来ようと思わ



am

ない、と言ったことに、私は心を打たれた。それは、差別されている朝鮮人と結婚し、差別のない夫の国へ行こうとした自分を、祝福も励ましもしてくれなかつたばかりか、反対に恥ずかしく思つて世間に隠そうとしてきた肉親や親族に対する、女性としての自尊心の表現なのである。と同時に、それは逆説的に、彼女たちが今は自分で道を選ぶことができないことを表明している言葉のようにも、私には思える。

親に捨てられた中国残留孤児たちも、自分が好きになつた男の国での生活を選んだ彼女たちも、ともに残酷な歴史に翻弄されてきたことに変わりない。だが、孤児たちが中国の養父母への恩愛といたわりと母国への憧れとの間に自分たちの心の場所を作りあげてきたのに対して、北朝鮮の日本人女性たちは、自分が選んだ道と考え、そう強調しなければ、理不尽で異常な国家の政策に支配されている現在の自分の生を、自分自身に納得させることができないのだ。

「日本人妻」は、日本と朝鮮の過去と現在に相わたる歴史の解明を迫る具体的な課題だから、「自分の選んだ道」という、彼女たちの健気な気持ちの表明にほつとして済ませることはできない。かつて昭和天皇は、「戦争責任」というような文学的テーマ」などに答えることはできないと言つたが、「戦争責任」というような文学的テーマ」には、朝鮮人の妻として夫のアイデンティティを優先して生きた女性たちが黙して語らなかつた、心に広がる闇がこめられている。女性たちが、「女性」という単一なアイデンティティに疑問を抱いて複層的な自己規定を求め、あるいはその煩わしさから逃避して女性というアイデンティティそのものを放棄してしまおうとしている傾向も見られる今、一時帰国した日本人妻たちから、私はもつとも今日的な女性の問題を投げかけられたような気がしている。

(みずた・のりこ)

☆「いきいきごんぼ」で桑田さんが書いている「亥の子」。私の故郷にも『13夜巻き藁』という同じような行事があります。収穫を祝って各家を廻りお菓子や祝儀をもらう、男の子の行事です。戸数の多い地域では小1の子でも5000円前後の分け前があると聞き、30年程前女の子であった私は、「不公平だ!」と強く思ったのでした。今でもそう思う私は「PTAのお母さん」であり、将来あるみずみずしい我が娘たちにうらやましさを禁じえない私は「山姥の予備軍」? (山下)

♣「やっぱ問題発言ですかねえ…」と気にする桑田さんに、「別に気にするほどのことじゃ…」と自らの山姥性を自覚する私は気楽に答えたのですが(笑)。初めてお会いした時、もののけへの畏敬の念や魚つりや虫とりといった男の子の遊びを現在進行形で熱く語る姿にびっくりしました。同世代ながら地方都市の新興住宅地に育った私には経験できなかった世界なので、『絵の中の二人』という絵本作家の田島兄弟の映画の風景を思い浮かべつつ、毎月楽しみにしているのです。(中村)

◆今月はもののけ尽しといった趣の編集後記なので思い出したのだが、ウチの子が幼児のころ、「暗くなる前に帰ってらっしゃい。暗くなってからも遊んでるとク神隠しに連れてかれちゃうから」といつも脅していたものだから、他所の家で遊んでいて夕方になると「あっ、暗くなってる。神隠しが出るから帰らなくちゃ」とあわてふためくのは物珍しかったらしく、「ク神隠しクなんて聞いたの何十年ぶりかしら。懐かしい」と言われた。桑田さん、能勢にも神隠しはいますか? (吉田)

♠「えっ、もう編集後記?」という時を何度か繰り返して今年も暮れようとしている。一年がだんだんスピードアップしているような気がする。今月号は、予定の入稿日に入れようとみんなヤケに気合いを入れて取り組んでいた。1月号を年末に出して人並みに年末年始をゆっくり過ごそうという魂胆か? 昨年は年末の発送時には大風邪をひいて、そのまま寝正月に突入。このまま死ぬんじゃないかという久々の鬱状態で休みを使いきった。でもフェニックスのごとく蘇り、また一年が過ぎたわけ。(河村)

♥いつのまにか特集のテーマもその時々飛び込んできたもの、即興でひらめいたイキのいいものをキャッチする方式になってしまって、原稿が集まったあとで「テーマが決まらな〜い」と騒いでいたら、吉田さんが「いっそのこと<闇鍋>にしたら?」。さすがに仰せの通りにする勇氣はなく、月並みに収めました。が、「外国は進んでいて日本はダメだ」というおきまりの啓蒙のパターンでは元気が出ないので、少しは希望を持てるメッセージになりましたかどうか……。♥20年前、英語の先生のマージがある日、「あなたたち、一緒に暮らす人に何を一番望む?」と聞きました。「私はね、これよ!」と黒板に勢いよく書いてくれたのが「センス・オブ・ユーモア」。「たとえ屋根が落ちても笑っていられるってこと」。温かくてキャパシティの広い人でした。「天使は深刻にならないから翔べるのです」のセリフを聞いてふっと思い出しました。(稲邑)

★Weの会の忘年会が12月13日(土)の夜あります。ご希望の方はご連絡下さい。  
★次号は「稼ぐ・働く」です。(編集室)

くらしと教育をつなぐWe 58号 (Vol.6 No.8) 1997年12月1日発行 〒154 東京都世田谷区池尻3-2-3-703 定価630円(税込) 年間購読料6800円(送料共) 発行/フェミックス 編集/稲邑恭子 中村泰子 吉田静恵 印刷/(有)イー・エム・ビー	TEL/FAX 03(3424)3603 郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス 富士銀行 池尻大橋支店 普1501277
--	---

■連載

「おんなが歳をとるということ」木村栄

「シネマの魔」武田秀夫

「変な子じゃないよね」滝野澤直子

「いきいきごんぼ」桑田良彦

「このままではいけない？」吉原令子

「薦森樹の巡業日記」

「セックスレスなわたしたち」

「居場所考」水田宗子

■女と男の家庭科新時代

「フェンスをこえて」小平陽一

「私の家庭科ラフ・スケッチ」

「授業風景－風がかわる匂いがかわる」

「楽市楽座」加藤昭仁

「かる～い 家庭科相談室」

「共学家庭科 論争」

「オホーツクの潮風荒く」江口凡太郎

くらしと教育をつなぐWe

1997年12月1日発行 第6巻第8号（通巻58号）

定価630円（本体600円）年間購読料6800円（送料共）

郵便振替 00130-7-754314フェミックス